

529

33



始



9.1.15

俳諧寺一茶著
勝峯晉風解說

入村家藏版

一茶旅日記

東京古今書院發兌

大正
13.7.16
内交

ふんまふかてすりし
ふんまふかてすりし
ふんまふかてすりし

布

あまふふ

あまふふのふんまふ
あまふふのふんまふ

あまふふ

あまふふ



文化五年 正月

一日晴 竜のまつり
あけぼのまつり
正月 湯のまつり
二月 湯のまつり
三月 湯のまつり
四月 湯のまつり
五月 湯のまつり
六月 湯のまつり
七月 湯のまつり
八月 湯のまつり
九月 湯のまつり
十月 湯のまつり
十一月 湯のまつり
十二月 湯のまつり

十六日 湯のまつり
十七日 湯のまつり
十八日 湯のまつり
十九日 湯のまつり
二十日 湯のまつり
二十一日 湯のまつり
二十二日 湯のまつり
二十三日 湯のまつり
二十四日 湯のまつり
二十五日 湯のまつり
二十六日 湯のまつり
二十七日 湯のまつり
二十八日 湯のまつり
二十九日 湯のまつり
三十日 湯のまつり

二月

一日 湯のまつり
二日 湯のまつり
三日 湯のまつり
四日 湯のまつり
五日 湯のまつり
六日 湯のまつり
七日 湯のまつり
八日 湯のまつり
九日 湯のまつり
十日 湯のまつり
十一日 湯のまつり
十二日 湯のまつり
十三日 湯のまつり
十四日 湯のまつり
十五日 湯のまつり
十六日 湯のまつり
十七日 湯のまつり
十八日 湯のまつり
十九日 湯のまつり
二十日 湯のまつり
二十一日 湯のまつり
二十二日 湯のまつり
二十三日 湯のまつり
二十四日 湯のまつり
二十五日 湯のまつり
二十六日 湯のまつり
二十七日 湯のまつり
二十八日 湯のまつり
二十九日 湯のまつり
三十日 湯のまつり

十六日 湯のまつり
十七日 湯のまつり
十八日 湯のまつり
十九日 湯のまつり
二十日 湯のまつり
二十一日 湯のまつり
二十二日 湯のまつり
二十三日 湯のまつり
二十四日 湯のまつり
二十五日 湯のまつり
二十六日 湯のまつり
二十七日 湯のまつり
二十八日 湯のまつり
二十九日 湯のまつり
三十日 湯のまつり

一茶小傳

寶曆十三年五月五日生る。信濃國水内郡柏原驛の農彌五兵衛の長子也。小林氏、彌太郎と通稱す。三歳母を失ふ。繼母さつ女來る。異母弟仙六生れてより家庭不和也。江戸に上る。葛飾派の俳人竹阿の後を襲ぎ、二六庵菊明と號す。後、俳諧寺一茶坊と名乗る。享和元年父の歿後弟仙六と家産を争ひたるが、漸く和解し、文化十一年五十二歳、始めて妻菊女を娶る。中風を病み一旦癒へて蘇生坊と稱す。晩年病再發し、火災の後土藏中に起臥し、文政十年十一月十九日遂に歿す。年六十六。柏原驛明專寺に葬る。

古人詩品、其目二十四。一に曰く雄渾、一茶の詩はこれにあらざる也。二に曰く沖淡、一茶の詩、これにあらざる也。曰く纖穠、曰く沉着、一茶これにあらざる也。曰く高古、曰く典雅、曰く洗煉、曰く勁健、一茶これに當るに堪へざる也。曰く綺麗、曰く含蓄、曰く豪放、曰く精神、曰く縝密、また以て一茶を評すべきにあらざる也。曰く清奇、曰く委曲、曰く悲慨、曰く形容、曰く超詣、曰く曠達、曰く流動、亦復一茶の詩是の如しと爲す可からざる也。

然らば即ち一茶の詩品如何。曰く疎野は即ち是一茶の詩の有る所、唯性所宅、眞取不羈なり、開放また喜ぶべきならずや。實境もまた一茶の詩の有する所、取語甚直、計思匪深、冷然たる希音、

また悦ばしからずや。自然もまた一茶の詩の時に得る有ること
ころ、俯拾即是、不取諸鄰、手を著くれば春を成す、嗚呼また愛す可
からずや。瓢逸もまた一茶の詩の漸く詣らんとするところ、落
落欲往、矯々不羣にして、風に御する蓬葉、彼の無垠に汎ぶ、執る可
からざるが如く、聞く有らんとするが如し。一茶の詩の佳なる
者、或は此境地に入る、豈尙ぶべからずや。予謂へらく、一茶の詩、
疎野にして實境を兼ね、既に作家と稱すべし、況んや時に自然を
得、漸く瓢逸に詣る、一奇才たるを失はずと。知らず人の以て如
何と爲すやを。

大正十三年初夏

露 伴 道 人

(2)

序

この一茶の旅日記が何處に發見されて、いかにして世に出るや
うになつたかは、いづれ勝峯氏のくはしい紹介があらう。この
翻刻本の校正その他はすべて勝峯氏の骨折によつて成つた。
さういふ勝峯氏はさきに芭蕉の俳句定本を編んで、考證の精確
さ、嚴密さに、世にも稀な熱心を示した人である。この一茶の旅
日記が一字一句の末まで、原本手記の面影を注意深く傳へてあ
ることは、私がここに言ふまでもない。

一茶の晩年は名高い七番日記を通じて既に世に知られて居る
が、あの境地へ到達するまでの道筋のことは今日まで明かではな
かつた。享和四年から文化五年まで、一茶の生涯で言つて見る

(1)

なら四十二歳から四十六歳まで、彼の中年時代の主な部分、從來多くの人が知らうとしても知り得なかつた彼の放浪時代の全く不明であつた部分がおよそ五年ばかりの間に亘つてここに窺はれる。

この一茶の旅日記のやうに長いこと埋れて居たものが、よく失はれずにあつて、彼が没してから百年近くにもなる今日に讀まれる日の來たといふは、その事がすでに私達の心をそそる。これは江戸の假住居の佗しい行燈のかげなぞでその日その日に書かれたらしい心覚えの手帳で、人に見せるためのものとは、その性質を異にする。全く準備なしに讀めるとは、斯うした日記の謂だ。

ここには貧しさも、佗しさも、拙なさも、掩ひ隠すところがない。

けれども人としてよく知らるることは、なまじい世に持てはやさるるにも勝つて古人の本懐とするところであらう。この日記の書きはじめにある享和の四年あたりは一茶の生涯に一期を劃するほどの重要な時代であつたらしいこと、それを彼自身に革命の年と呼んで居ることなぞが、先づ私達の心をひく。古大家の生涯に就いて考へて見ても、晩年にして達した人がいつの時代にもさう澤山にあつたとは思はれない。一茶はその稀な人の一人だ。その人の持つて居るあらゆるものが隈なく熟するやうになり、長い獨身の生活からも解放され、妻を恵まれ、子を恵まれ、豊かな詩の收穫を恵まれるまでに、五十年の年月を要したやうなのが、一茶の生涯だ。この老年は尊い。私達が一茶に就いて知りたいと思ふことも、いかにしてその豊かな老年

に達し得たかであつて、この一茶の旅日記の深い興味を覚えさせるのもそこにある。

寝る外に分別はなし花木樺

夕燕我には翌のあてはなき

何といふ窮迫だらう。『遊民々々とかしこき人に叱られても、今更せんすべなく』といふやうな言葉が、これらの句の一つの前書きにも見える。鍋買、米買、暮の二十九日の『雨、味噌』なぞと、しるしてある僅かな断片的な言葉を通じても想像されるやうに、本所五ツ目あたりでの一茶の生活はいかに佗しいものだったらう。ここには『貧しきをもつて富めりとする』といふやうな超越は味はれない。在るものは、赤裸々な貧乏と、それを耐へ忍ぼうとする人の現實の苦しみと、『貧して分を知らざれば

盜か、衰へて分を知らざれば病を受く』との反省と、『米高直なるが故に、薪高直なるが故に、玉をかしぎ、桂を焚く』としてあるやうなユウモアとである。

この窮迫の中で、一茶が一度故郷の柏原に歸つて行くくだりは、この日記の中でも最も私達の心を動かす頁の一つだ。故郷とは、人の少年時代の記憶のあるところに外ならない。『國に行かんとして心すゝます』と書いた一茶は、柏原の農夫を父とし三歳の時に迎へた一婦人を繼母としたといふその少年時代の記憶のあるところへ歸つて行かうとした。彼は腹ちがひの母子の苦い争鬭を深刻に経験した人の一人だ。日記で見ると、あの時の一茶は江戸から大宮へと取り、深谷、安中を経て峠に二日を費し、輕井澤から上田、善光寺へと出て、都合九日もかかつて柏原

に入つたとある。

雪の日や古郷人のぶあしらひ

夢寐にも忘れなかつた故郷の方で彼を待つて居たものは、こんな不機嫌なものであつた。

心から信濃の雪に降られけり

これらの句を讀むと、一茶その人の慟哭を聽く思ひをする。同時に彼の一生を支配したと言つてもいいほどの少年時代の深い影響を思はせられる。

一茶の句にあらはれた『ひがみ』の多い性癖が繼子としての彼の生ひ立に基くとは、多くの人の一致するところである。彼の小心彼の遠慮深さ、『人心は山川よりも險しく天よりも知りがたし、天には春夏秋冬旦暮の期あり』と嘆息してあるやうな

彼の不斷の心づかひ——これは皆、不和な家庭の裡に知らず識らず養ひ來つた少年時代からの深い影響に相違なからう。彼の小心と遠慮深さは、この日記にもあらはれて居るやうにいたいたしいほどのものだ。しかし、彼が多年の放浪生活の間にあつて一筋に自己の道を踏んで行つたといふのも、多くの時代の誘惑から自己を護り得たといふのも、その小心と遠慮深さからではなかつたらうか。

詩人としての一茶を考へて見るものにとつては、彼と同時代に戯作者としての三馬、一九のやうな人があり、浮世繪師としての歌麿のやうな人があり、狂言作者としての鶴屋南北のやうな人があり、歌人としての千蔭のやうな人のあつたことを忘れてはなるまい。一茶がこの旅日記をつけた頃は江戸時代の文化が

爛熟の絶頂に達したと言はるる所謂文化文政度の初期にあたる。その空氣の中に私達は信濃の水内地方から出て来たやうな一茶を置いて想像して見たい。この日記を讀んで行くうちに私達が涙をさへ誘はれるやうな氣のして来るのは、ただ彼が極度の窮乏に耐へ忍んで居たからといふばかりではない。無器用で、正直で、狭量で、多分の野性に富んで居て、彼自身の言葉を借りて言へば『江戸じまぬ』人の放浪生活が、當時にあつて奈^いかに不調和なものであつたかは、想像するに難くないやうな氣がする。

同じ徳川時代とは言つても、一茶が吾國での十九世紀初期の詩人である^と考へて見るところに、また別様の趣が生じて来る。すべてものに近代の曙光のかがやきがあり、人の精神が發揚し、

學問も藝術も一齊に歩調を揃へて進んだかと思える吾國での十七世紀に、詩の燈火を高くかかげたやうなのが芭蕉だ。それに比べると、一茶の時代は社會の刺戟からして異なつて居たと思ふ。一方には蘭學の發達があり、一方には萬葉の研究、古語の研究と共に、古代詩歌の精神の復活があり、一方にはまた武士的新人としての頼山陽のやうな人が日本外史の稿を起しはじめて居る。歌麿の浮世繪を見ても知らるるやうなデカダンスの傾向は、その間に濃く漂ひ流れて居る。何處に精神の統一が求められたらうと思はれるやうな時代だ。すべてのものはその統一を欲して叫びを揚げて居たやうな時代だ。こんな激しい時代の動搖と、爛熟し頽廢した社會の空氣とは、むしろ一個の多感な野蠻人を必要としたかと思ふ。またその野性なしに、一茶があ

れほど独自の詩境を開拓することも困難であつたらうと思ふ。一茶は詩歌の上で極度にまで自己を打ち建てて行つた詩人だ。彼ほど自己を中心として、『我』とか『己』とかの言葉を憚らず使用した人は俳諧の世界にめづらしい。およそ詩歌の集で詩人の心の歴史でないものはない筈であるが、一茶の書き残したものでは殊にそれが目立つて見える。この旅日記にあるかすかすの句は、詩歌の形式によつて書かれた自叙傳とも言ひたものである。そこに詩人の強い執着が見える。

一茶は自然詩人であらうか。ある人は芭蕉すら人間本位の詩人であると言つて、純粹な意味での自然詩人は吾國に見出されないと言つた。その意味から言へば、一茶はもとより自然詩人とは呼びがたい。彼が創造した苦笑は、飽くまでも自己を中心

としたもので、その底には一種の社會苦とも言ふべきものをすら潜ませて居る。この旅日記の隨所に散見する盜難、殺人、出火、男女の身投げなどの記事は、所謂花鳥風月を友とする俳諧師の手帳には不似合なもので、おそらくその點で讀者に奇異な思ひを抱かせるであらう。けれども、詩人としての一茶の眼が絶えずさういふ社會的の事象にそそがれて居たと想像するところに、私は特別の興味を覺える。そこに解を得ることも多い。

玉の盃底なきがごときといへど、色好むは人性にして、好まざるは獲麟よりも稀なり。あるは染殿の姫を思ひ、あるは物洗ふ女に迷ふ。やごとなき僧正、雲に住む山人すら此一筋は踏み留めがたくやありけん。僧教導は佛道のいさほしも九五近

き身の戒を破りし罪となん、巷に面晒さるゝ、よそ
目さへいとほしく、にがくしくぞはべる。

雪汁のかゝる地びたに和尚顔

これは鎌倉圓覺寺の老僧が日本橋に晒された時に書いた一茶の日記の一節だ。『よそ目さへいとほしく、にがくしくぞはべる』と言つたところに一茶の面目があらはれて居る。

一茶の俳句に見逃しがたいと思ふことは、物の不釣合なところに寄せてある滑稽だ。そこから度はづれた感じを喚起する。

これは英語でいふ grotesque に近いものだらうか。芭蕉の心の深さを見せたやうなユウモアを味つた後で、この一茶の滑稽に接すると、一寸まごつくやうな心持をさへ起させる。これは一茶の創造した特有の美であり、他の持たないものを持つて居た

證據だと解すべきであらう。

うつらく紙衣仲間に入りにつけり

家もはや捨てたくなりぬ春霞

木つゝきの死ねとて敲く柱かな

藪の蜂來ん世も我にあやかんな

これほど深い嘆息がこの日記の中に泄してある。しかし、この日記は終の方に近づけば近づくほど、詩人としての心の澄んで行つた跡が見えて、それを辿つて見るのも楽しい。この日記なぞを讀んで見ても、吾國の遠い傳統ともいふべき繊細な寫實主義のいかに根深いものであるかを思ふ。一茶のやうな強い個性をもつた詩人なればこそその繊細な寫實主義を突過するこゝとが出来たのだと思ふ。

笋や憎まれ草も伸支度

旅日記一巻はこの憎まれ草の伸支度だ。萬苦を経て後に達したやうな人の長い長い準備の記録だ。

ある人も言つたやうに、一茶は芭蕉のやうな大きな詩人ではないかも知れない。あの芭蕉に見るやうな純粹な心は、あるひは一茶には見出されないかも知れない。けれども、私達の煩惱を代表して居るやうな一茶の強い執着は、自己の欲するところを藝術にも生活にも實現せずには措かなかつた。その心は晩年に到るまでもすこしも衰へなかつた。芭蕉や蕪村に比べたら、一茶はずつと私達の時代に近い人だ。

五十にして冬籠りさへならぬなり

一茶は正直に、冷い涙を見せて居る。

大正十三年六月

麻布飯倉にて

島崎藤村

一茶旅日記に就いて

雪はすこし小歌みになつた。スチームの氳氣うんきに汗を覺えた僕は窓硝子をはづした。重い、しかし急激な音をたて、戸が落ちると共に、透明な冷い空氣が快く頬を撲つた。汽車はいつのまにか停車場に入つてゐた。僕のとまりの車窓に一人の女が話し掛けて居る。みなりは銘仙の中柄な素人ごしらへだが、銀杏返しの髪のごあひ、がさつな口のきゝかたが、遊藝の師匠らしい。場末の町で三味線を抱へて、小娘に踊の一つも教へてゐる——女と直覺した。僕のとまりの夫婦者は「どんちゃん」とその女を呼んでゐた。汽笛が鳴つて窓をしめる時、ホームの掲示板に「新井」とあるのが僕の目に映つた。ゆるく動いた汽車の中から、改札口を透して驛前の人家が見えたが、恐ろしく雪のつもつてゐる町だ。さう思つただけで僕は振回つてうしろを見た。さつきの女と話した夫婦者は子

供をひとり連れてゐた。『どんちゃん』の名をしきりに繰返して、お座敷だの、旦那だの、喋つてゐるので、あれが藝者だつたのか。お粗末な恰好だ。炬燵にあたつて、あゝした女に酌をさせる町の人々の風俗が思はれた。今年の二月富山から歸る汽車中の小景である。僕はそれから柏原で途中下車し、一茶の墓を見るつもりだつたが、雪が深いので小丸山公園には登る道がない。いびつな町を本街道へ出て小林彌左衛門老を訪ひ、一茶の逸事を聞き、雪沓に穿替へてその裏庭の六七尺もつた雪の上から、もう暗い夜になつておぼろ氣ながら、それと指される一茶の土藏を眺めて、一茶の後裔小林彌太郎氏の所持する過去帳や句稿を、鎌の組合事務所のごみくした二階で見せてもらつて東京へ戻つた。

その翌月である。越後の入村誠氏が三年振り僕の家に見えた。先年巖谷小波氏の名刺を持つて、一茶の日記を見せに來られたので、僕はひどく懐かし

つた。暫らく話してから『あの柏原から二つ三つ先の、あの停車場が、あなたの町でしたかねえ』僕は入村氏の住む越後の新井は、ずっと海岸の柏崎邊だらうと莫然思つてゐたので意外だつた。そして『どんちゃん』といふ藝者の顔は忘れたが、後ろ姿が眼前をふと掠めた。『小さな町ですが「あそび」はさかなな所です』と入村氏から聞いて、僕の第二の故郷北海道岩内の、同じやうに雪に閉されて「あそび」にふける冬の生活が浮んだ。

その町にどうに散佚した筈の一茶の日記が、斯くも完全に保存されてゐるのは、一トふしぎでなければならぬ。『たしか、あなたのお父さんが馬子からもらったとか聞きましたね』僕の三年前の記憶が、きのふの事のやうに甦つた。『ええ、あれから又聞きましたら、父が骨董をいぢるので、相當の金で手に入れたのださうでした』それにしても全然縁故のない土地へ持つて行きつこはない。越後の新井は柏原からすぐ國境を越えての宿驛つゞきなので、一茶が焼残りの

土藏で最後の呼吸を引取つた時、或る闖入者が机邊の句帖類を持ち出して、一物も残さなかつたといふ一茶句集の編者、それはおもな門人の語を信するならば、大膽に持ち出したものゝ、迂濶に世間へ出しては、うしろ指をさゝれるので深く秘めて置いたのが、明治以後その秘密に關係ある家から、ひそかに四方へ取出された中の此の一冊が、新井の町へ紛れて行つたのもあらう。入村氏の先代は縣會議員にも出た名望家なので、比較的近年誰からか求めたのであらうかも知れぬ。明治四十三年の一茶同好會で全國に涉つて、一茶の遺稿を捜した際には、この日記の所在をつき止められなかつたのは事實だ。

一茶の生涯で殊に記録の備はらない江戸時代の資料として、一層光輝あるこの日記が、時こそ後れたが、かう保存されてゐる事を知るのは喜ばしい限りだ。入村氏が最初携へて來た當時僕は出版の意がないかをたしかめた。糸魚川の相馬御風氏から世間に出す前に、自分に研究させて呉れといはれてゐるので、氏

に相談して出版しようかとも思ふこの話であつた。その後、僕は句佛上人の『懸葵』で、相馬氏がこの日記の片鱗を紹介したのを見て、いよいよ研究が届いて論文に添へて出版される事かと待ち構へてゐた。僕は相馬氏とは交渉はないが入村氏の承諾を得て、誰れでも刊行してくれゝば好い譯なのだつた。こんど入村氏は僕に托して出版をする意圖を持つて上京されたのは、氏自身には荷にあまるといふ謙遜と、且つは先代の意志を果す目的からなのであつた。

僕は入村氏の希望によつて、一茶とは同國でこの種の文献には理解を持つ古今書院橋本福松氏を紹介した。入村氏及び氏の義兄の陸軍大佐宮下善告氏、それに僕が仲に入つて、古今書院に出版を托する相談が決した。僕は原本を預つて森無黄氏の周旋で知つた河井菱花氏にその筆寫を依頼し、二十日間で原稿が出来た。僕は更に原本と對照して文字の擦損せるものを、能ふかぎり判讀して印刷所へ廻し、校正中は常に日記の原本を坐右に置いて、再校、三校、四校と

進捗するに随つて缺字にした部分を補ひつゝ、一小部分を除き、ほと判讀する事を得たのだ。發端の藝者の話は日記と何の因縁があるのではない。僕の新井町に對する第一印象なので、思ひ附を起筆とした迄である。この邊で本文の解題にうつらう。

こゝに翻刻する一茶の日記は、當座の用件とか、見聞又は感想を後日の備忘とする一般的のものではなく、一茶が日々の發句を手控の爲めに、日附の下に記入して置いたので、かの七番日記と大同小異の内容である。一茶旅日記の標題は僕がかりに附けたので、一茶の日發句とか、江戸日記とした方が寧ろ適切であつたかとも思ふ。旅日記は讀者の聞えは好からうが、旅行中の日記、紀行の如く誤解されないでもない。唯、旅日記は標題として頗る響きがよく、人生の行旅者といふ意味、それに江戸時代の一茶は住みつかぬ旅の生活でもあつた

ので、強ち不妥當ではないと思ふから、それなり改めずに置いた。

原本の大きさは竪六寸、横四寸一分の小菊型で、枚數は百十七枚、どこへ携へて行くにも嵩張らないで手頃なものである。表紙といつて別に附いてない。本文を綴じた紙摺をかくすために右端に包み返した半紙を、その儘代用させてある。小口は煤けて焦茶色になり、本文は讀みつかれで、字體の不明瞭なのは、まだしも、全く擦りきれてしまつた箇所もある。一見不審に感じられるのは、洋装の書物なら標題の背文字を入れる中央のところに、竪二寸、横五分ほどの穴を深く抉り取つたあとのある事だ。

この抉り抜いた穴は一茶の考案になる行脚用の墨壺入れである。他の句帖にも同一の體裁があるし、現に木で造つた粗雑な墨壺すら遺物の一に残つてゐるさうである。なかを開いて尻から墨壺をさし込んで置けば、どこを開けてもその墨壺があらはれて早速使へる趣向なのである。小刀で截ち込んで、風拔きの窓

でも拵へるつもりで、丹念に紙の中を抉つて行つた一茶の不恰好な手附きが思はれる。用紙は半紙を小菊に截つて綴じたところもあるが、不用の冊子をこわして裏返しにしたもの、及び書き汚しの反古を折つて裏の白紙を利用した部分もある。冊子は一志庵一峩とその一派の春興で、

寛政萬年之五癸丑

試影管

實やあふぎてもことも愚やかゝるよにすめる民とて

豊なる君の恵を實や有難きく

又たぐひおほんはつ日の山かつら 一志庵 峩

こんな謠曲がりの詞書附の歳旦と、模様式の松の葉をあしらひ、牛の背に笛を吹く人物畫などをさし繪に用ひてゐる。作者には一茶の敬事した今日庵元夢の名も見える。書き汚しの反古は歌仙の懐紙代りとした草稿で、下總の恒丸の

同庵(妻女)素月の附句などがあつて、もどく一茶の書き汚しではなく、その裏を二度用ひる考へで、誰かにもらつてそれを綴ち込んだのである。

日記は本文を二段に分ち、中央に朱線を引くか、小刀のみねか錐かで、筋をつけるかして上下を區劃した上、細字で記入して行つたので、その書く順序も人と違つて、上段から下段へ讀みつゞけず、上段は上段で一月ぶつ通しに何枚でも書き通し、それから前に戻つて次の月の日記を下段なら下段に書きつゞける遣り方で、時には上下が混線してゐて甚だ讀みづらいが、一茶には却つてさう書いた方が都合よかつたのだらう。

さて内容の説明である。日記は享和四年改元して文化元年から同五年まで使用したのである。その前、享和元年五月、父彌五兵衛の最期の枕元で繼母と争ひ、醜い人間性をさらけ出した一茶は、その憎しみを藝術に反映させて、まゝ

子一茶のいちじるしき個人色をその句々に因縁づけ、そこに新しい句境を發見したのであつた。この日記の享和四年の作に既に後年の一茶特有な事相の觀察、一茶のみが持つ表現の仕方をしたものを多く見受ける。たゞ古い酒のおり(滓)がどこかに淀んで、明澄なる可き個性を濁してゐる點をも認め得る。それが文化二、三、四、五年になつて來ると、酒のおりは漉されてよく澄みとげ、一茶ならでは掴めない人間の魂を映寫させて居る。一茶の藝術——句境はこの日記の前後に確立されたので、その意味から一茶の凡ゆる記録中で第一義的な價值を持つてゐるばかりか、一茶の生涯で研究資料の無に近いので、その傳記作者の筆を晦澁ならしめた江戸時代の考證に、いろ／＼な手掛りを與へる點に於て重大な二次的收穫さへ得らるゝのである。

だからこそ一茶はその試筆に『今歲稱革命年(情)四十二年他國送(星霜)』といふ感慨を記してゐるのだ。革命の年とは支那風の日月の運行から政治的の革命

を豫言する語ではない。孔子の四十にしての惑はずの人間的な革命を稱するのである。つらく(情)四十二年は一茶がその年を指折つて見て、『おれも四十二だ、なんとかせすばならぬ』といふ焦燥な心持である。他國に星霜を送るは僕の一茶旅日記の命題にヒントを與へた語で、他國の旅に人生行脚の心を托したのだ。革命の年を内省して『なんとかせすば……』の焦心は五年間の日記を通じて、一茶の生活には殆んど何の反響を來さなかつたが、藝術家として日本文學に於ける近代的色彩の強い唯一人を出現する機縁となつたのである。

日記中の一茶の作は都合二千四百十七句である。文化元年から同五年四月に至る間の全收穫である。これを一箇月に平均すると四十六句強で、一日一句半づゝの作句量になる譯だ。口を出れば再び推敲しない一茶が一日平均僅に一句半づゝは、聊か不勉強なやうでもの足らなく感じられる。芭蕉は一生で千句を

こそこの作に過ぎないのと比較する時、五年間に二千四百十七句は非常な作句量である事に驚かれよう。一茶には推敲をしない代りに、同一の想を同一の用語で反覆する類句の多い事實を否定されぬ。一茶もそれを承知してゐる。日記には我が意に適した句々に、或は朱引を附し、或は筆の鞘で擦したのだらう、朱肉で句のかしらに丸い圈點を施してある。察するところ、諸方から集冊に出句を望まれて、書き送つたしるしでもあらうか。享和四年一月の部から二三抄出して見る。

兩國橋上看三紫曙

春立や見古したれど筑波山
ほうろくをかぶつて行や春の雨
あたふたに蝶の出る日や金の番
一つでも鳴て行也かへる雁

橋上から眺めた「春立つ」山の印象は平凡だが、「春雨に」ほうろく(炮礫)を冠つて走る滑稽は一茶の持味である。「金の番」は一茶の好んで材料にする用語で、店藏の中の人物を明るい氣分にまで引出してゐる。「一つでも」はまゝ子一茶の境涯である。これを翌二年正月の

龜井天神宮

御 櫻 御 梅 の 花 松 の 月
片里や宿なし乙鳥暮いそぐ
さし柳あすは出て行く庵也
かすむ日や夕山かげの餘の笛

の諸作に比較すると一段見劣る。御櫻は「それでこそ御時鳥松の月」の下地だが、御の字が後者ほど直接に迫つて來ない。「宿なし乙鳥」はまゝ子一茶の感慨で、前年の「一つでも」と同じ心の壺だが、それよりは深く突込んでゐる。「さし柳は」

人間一茶の生一本な主観の投影である。「かすむ日や」は後に持句としたのだらう。文政版の一茶發句集に採録されてゐる。次の文化三年の正月には

春ぞとてし しぶく 咲し 椿哉

陽炎や子をなくしたる鳥の顔

霞む日や門の草葉は晝時分

鶯のあてにして來る垣ね哉

などの作を見るが、しぶく 咲しは芭蕉の「葉にそむく椿や花のよそ心」と同一の着眼で、しぶくの一語によそしく 咲く、その花の本性を看て取つてゐる。「陽炎や」はきよと不安さうな鳥の顔を、浮彫のごとくそこに浮かせてゐる。「霞む日」は無技巧の自然觀照である。「鶯の」は後になると鼻について厭味な一茶調の、しかも感心しない見本だ。

はつ春やけぶり立るも世間むき

山里や油手ふくも梅の花

行雁がつくく見るや煤壘

うら門のひとりでに明く日永哉

文化四年の句は無圈點のものから抄出した。一茶の句は感情の誇張から來たウソがある。表現に無理はないが、お座なりで、拵らへたウソの句がある。『はつ春』の作の如きである。「油手拭く」はウソでないが山里だから梅もふんだんに咲いて賞美者がない。そこを覗つた理窟の句である。「行雁」は巧みな擬人法でウソから救はれてゐる。一茶の特殊な技倆である。「うら門」は天衣無縫の作であるが、概して四年は作句の量も乏しく、生命の躍動した作を發見し難い。それから文化五年の句では

初蝶の一夜寝にけり犬の枕

我を見てにがい顔する蛙哉

三崎野中の井は遊女柏木がかたみなり

わか水のよしなき人に汲れけり
喰つみも小隅の春となりにけり

「野をなつかしみ一夜寝にける」は董摘む萬葉歌人のころ、犬の枕に蝶々を寝させるのは一茶の人間的な描法である。にがひ顔するは「また来たか」と煙たがられながら押し強く出る一茶の逆手である。「わか水の」句は文政版の一茶發句集に出てゐる。素直な巧まない作だが、一茶の手を藉りなくてもこんな程度なら作れる。喰つみは小隅が利いてゐる。重箱の隅だ。小は一茶の慣用語でよく働いてゐる。

要するに一茶旅日記の句は、一茶が自分の生活に詩を發見し、そこに驚異を感じた新句境から生れたものである。享和以前の作に見られない個性をその句句に握つてゐる。一茶の特徴は此の旅日記から、旅日記の時代から發揮された

事を頷いてくれば、僕は満足する。

一茶旅日記の開卷見返しを注意してもらひたい。「本所五つ目愛宕別當一茶」といふ宿所附があるだらう。愛宕別當は略譜に記したやうに無住寺かと思はれるが、寺號にしては別當が可笑しい。山伏の修驗所だらうといふ推測の方がまだ好さうである。文化元年四月九日の日記に「榮順法印遷化」とある。法印は僧官だが此のころは山伏を稱してさういつて居た。その後の十五日の日記には「榮順法印葬式」といふ記事がある。愛宕と山伏榮順とは關係のありさうな書き振である。榮順は此の愛宕で遷化したので、一茶がその葬送にも列なつたのでないかとも想像される。それに五月二日の日記には「院代來ル什物改」と記してある。院代は愛宕の院代だらう。什物改の立會與右衛門、鐵五郎の二人は信徒であらう。別當は一茶が寄寓して「おれはこゝは別當だぞ」と一人で威張つ

て書附けたのでならうか。とにかくも本所五つ目に住居したのはこれまで知られない新事實だ。深川八丁堀及び本所相生町五丁目に引越して行つたのは、一茶の傳記にも見え、僕の略譜にもあげて置いた。

同じく見返しの「書通所 大門通和泉町京屋庄七」は、一所不定の一茶が諸國の俳人の文通の取次ぎを頼んである文音所だ。三韓人の奥附に「江戸便所 小傳馬町三丁目幸手屋茂兵衛守靜方」とあるそれに該當する。今日なら局止、又は私書函何號といふところである。

一茶は二六庵を襲ぎ菊明と號した時代がある。菊明を改めて俳諧寺一茶と名乗り、西國を數年間行脚して來てゐる。俳諧師の修行はこれで充分で、その資格を持つてゐたらうが、依然一個の遊俳であつた。貧乏で立机されなかつたのか、文臺開きなんぞして、宗匠附合ひをするのを嫌つてゐたのか。俳席へ出て一座を

捌いたり、判者になつて點料をもらつたり、俳諧を道具に生活して行つたと思ふ材料はない。そんならなんでも暮してゐた。日記の記事から考へると、行脚に出ては草鞋錢をもらひ、それを溜め込んでちびりくゞ小遣ひに使つてゐたやうである。五年間の日記に暮の配り餅と炭一俵、及び流山から家財を搬んで來たといふ以外、他人から米贈を造られた記事は一箇所もない。その辯米や油や机なんかも買つてゐる。日常の生活費は行脚のもらひ溜めと推定して好からう。藏前の札差、成目成美は一茶の江戸生活に附隨して、よく引合ひに出される裕福な俳人である。一茶の日記に月一度は必ず隨齋會とあるのが、此の成美の家の俳席の事である。文化二年の冬はよつぽど貧窮したのだらう。一椀の飯にもありつけなかつたらしく、同年十一月の日記に隨齋朝食といふのが四日、誓願寺朝食及び中齋夕食といふのが各一日見えてゐる。前晚泊つてその朝飯ならばふしぎはない。寝るのは自分の家で飯はよそへ呼ばれて行く。そんな場合

も再々はあり得ない。おそろく朝むつくり起きに出掛けて、こそく臺所からあがつて、ひもじい腹に一日の飯をかき込んで来たのだらう。

そんなに窮してゐるかと思へば、ときく芝居見物に行つてゐる。土佐座操見物」だの、「羽左衛門座見物」だのといふ風である。その記事の前後には行脚に出掛けた事が必らず出てゐる。行脚から歸つて小遣のすこしでも餘分に持つてゐれば、芝居を覗きにのこく行つたものらしい。一茶の行脚區域はほど定つてゐた。下總の流山と布川邊を中心として、上總の木更津にまで勢力を張つてゐたが、たまには相模邊をもあるき廻つて居た。下總は殊に一茶の扶持者かあつたやうで、僕の一茶全集に掲げた一茶翁文通の編者秋本斗囀の如きもその一人であつた。日記には地名のみで何の某方に宿泊したとはないが、三韓人の作者、雙樹、月船、恒丸、太筈は日記にも散見する名前なので、一茶が困つて行脚に来ればこゝろよく泊めてもやり、小遣ひもあてがつてやつたであらう。我

を見てにがひ顔」する家も、時にはあつたらう。

日記はその日の晴雨を缺かさないが、一箇所失念といふのがあつた。前日の發句をまた附けて重出したところがある。日々附けるのは面倒なので十日分位まとめて置いて記入したのでもあらう。

僕は略譜中に異變といふ一項を設けたが、事實一茶は火事と地震、人殺し、身投げ、首くゝりの三面記事に多少の同情もあつて、特別な興味を持つてゐたらしい。文化三年九月二十四日の本所相生町按摩殺しは、一茶を強く刺戟したと見えて、束松露香氏の俳諧寺一茶の中にも引用されてゐるが、この日記とは別の材料から採つたらしく、日附も文章も同一だが、發句は「冬枯にごちが先立つ草の花」で、日記の方は「今に見よ人とする人も草の露」とばかり、恐しい呪ひの釘を打つてゐる。罪咎のない盲人を鑿の鏝にした人非人がごんなに憎かつたらう。翌年の二月十三日の日記に「盲人を殺す曲者本役荒屋但馬守に生

捕らるゝと云」と、お上の手で敵を討つたから成佛しろと、盲人の靈に告げるかのやうな書き振りである。

神社、佛閣の參詣は一茶がその信仰よりは、開帳などの賑ひを物見遊山のつもりで出掛けたものらしく、月に三四回は日記にも出てゐる。琉球人の江戸入りを三人連れで見物に行き、おろしやに漂流した者の話を聞きに、俳席を中止した記事などが書いてある。それから文化元年十二月の日記に

十日 晴

神國の松をいとなめおろしや舟

春風の國にあやかれおろしや船

十一日 晴 月代

門の松おろしや夷の魂消べし

日本の年がおしいかおろしや人

といふ作がある。その年はロシアの使節レザノフが長崎へ来て、開國を迫つてゐたので、天下の遊民一茶も聞きかじりに敵愾心を起したらしい。月代まがやきを剃つてさつぱりした氣持になつて「おろしやがなんだ」と瘦腕をさすりながら、こんな發句をつくつてゐた一茶は、どこまでも無邪氣な愛國黨であつたのだ。

以上は一茶旅日記の解説である。その史的價値は批判者の見解にまかせて好いが、所藏者入村誠氏が本日記を刊行して、一茶の愛好者及び後の傳記作者の爲めに提供されたその事は、僕の喜悅これよゝ大なるはない。

大正十三年五月二十日

勝 峰 晋 風

附言

- 一、缺字にした部分は、最後まで判讀されなかつた文字である。
 - 一、かな遣ひは一切あらためない。誤字、あて字も讀者に推量のところはそのまゝにして置いた。
 - 一、送り假名のないところは、讀者の方で入れて讀んで戴きたい。
- 右は原本通りの體裁を保存したいからで、誤植、組違ひとばかり早合點されないやう、お断りする。

一茶旅日記略譜

發句 二千四百十七句

文化元年

二月十九日
享和改元

甲子 四十二歳

一月	發句 百十九	江戸に在り、本所五ツ目に住す▼行樂 上野東叡山に登る▼訪客 信濃柏原中村氏▼手抄 徒然草
二月	發句 八十九	千住の巢光の妻病むと聞き乙二、道彦と共に見舞ふ▼行樂 王子稻荷、太郎稻荷、上野東叡山▼書信 阿波徳嶋吉成氏
三月	發句 七十二	高野山にて苦行二十年の篤音阿闍梨、靈山寺にて教化あり、隨喜す▼行樂 洲先汐干、深川富ヶ岡八幡開帳、角田川花見▼俳事 兩國中村屋にて十歌仙披露▼手抄 本草、翻譯名義集、伊勢物語
四月	發句 四十三	紙帳の窓を蚊帳の切れにて造る▼異變 榮順法印遷化す▼行樂 富ヶ岡八幡開帳 院代來る、什物改の記事あれば一茶の寓居は、日記の見返しに愛宕別當と

一茶旅日記略譜

五月	發句 三十六	あるにより無住寺又は修験所にてもありしならんか▼異變 東橋に身投の男女漂着す▼行脚 下總流山
六月	發句 六十	下總地方を行脚すること七日、江戸に歸庵し、再び上總木更津に行く▼異變 日蝕、地震一▼行樂 山王祭、兩國大花火▼手抄 萬葉集
七月	發句 七十二	上總地方に在り、炎暑に惱まざる、事二十餘日にして江戸に歸る▼手抄 曠野集、行脚中也▼俳事 隨齋會(成美)一
八月	發句 七十六	十時庵(道彦)にて儒者龜田鴨齋等と出會す▼行樂 俄見物、隨齋茶番、木挽町神樂見物▼俳事 蕙志會、河内屋にて巢光會一、閑齋會▼行脚 下總流山
九月	發句 百廿九	下總布川近傍、宮新田半右衛門方にて留守居の老爺の疎忽火にて一家全焼せるを見て自誠の文あり、同押つけ村にて鶴を殺して一族刑戮されし者の埋葬所に詣づ、月末歸庵す▼行樂 土佐座操見物、羽左衛門座、元三大師御遷宮

文化二年 丁丑 四十三歳

十月	發句 二十九	淺草觀音▼行脚 下總布川近傍▼俳事 蕙志亭、金令會(道彦)、隨齋にて各一
十一月	發句 三十二	耕潤方にて文山の講釋あり、二回出席す。此月江戸に在庵▼俳事 隨齋會▼訪客 菜國、元貞、其寛、耳童、松井(炭一俵送る)、好潤、宮次郎、及び越後新潟の玉之寺▼異變 田所町、小網町出火二▼手抄 論語
十二月	發句 七十三	鎌倉圓覺寺の僧教導女犯の爲め日本橋に晒さる、教誡の文あり▼異變 兩國にて川水氷る、小川町出火▼俳事 閑齋、隨齋會四、▼訪客 月船、其寛、常南、五岳、元貞、宮次郎等▼行樂 淺草年の市
一月	發句 八十一	元日佃島住吉の初日出を拜す。心可同行す▼俳事 閑齋、其日庵、隨齋會各一▼異變 兩國元町出火▲訪客 二竹、信阿、常南、祇兵、浙江、梅壽、野松、一白、宮次郎、傳吉寺▼手抄 周易

道彦と上野に行き、清水舞臺に少憩す▼行樂 稻荷參詣、根津開帳、淺草

二月	發句 七十四	山門に登る▼俳事 仙風庵、閑齋、隨齋會外一▼訪客 梅壽、祇兵、耕潤 双樹、泉路、一白、月船等
三月	發句 二十八	中村、市村兩座を見物す▼俳事 桃原萬句出進賀、隨齋會▲訪客 巢光、 文國、耳童▼異變 小梅出火▼行樂 江左、成美、蕙志と池上に行く
四月	發句 十五	留守の月に掛け置けるなるべし、止錠を何者にか盗まる▼異變 多太薬師 長屋出火▼行樂 根津開帳(雨十同行)▼俳事 閑齋、隨齋會及び風化一周 忌
五月	發句 十八	下總を行脚し布川、流山に逗留する事十日餘にして歸庵す▲異變 法恩寺 橋出火
六月	發句 二十五	誓願寺雲哉上人を訪うて法談あり▼異變 鬼坊主清吉大路を引廻はさる▼ 行樂 淺草及び駒込不二詣、一ツ目辨天平家奉納
七月	發句 五十六	清彦の會、下谷池の端大山氏にて行ふ、閑齋にてホ句の會あり▼異變 遊 女花の井火罪▼行脚 下總地方に月の過半を送る

八月	發句 七十五	下總地方を行脚す、中旬歸庵▼手抄 發心集
閏八月	發句 百九	回向院十萬八千人の百五十年忌あり▼行脚 下總布川地方▼俳事 隨齋會
九月	發句 十二	女義太夫節法度、地震一▼俳事 隨齋會二
十月	發句 五十八	下總流山及び布川邊を行脚す▼俳事 隨齋會四、▼行樂 回向院角力
十一月	發句 五十三	成美の扶持を受けたる如く隨齋朝飯及び晝飯の記事數回あり▼俳事 中齋 隨齋會 三▼訪客 菜雨
十二月	發句 五十六	貧窮して知己にて食事を振舞はれたる如く誓願寺、隨齋、大口隱宅朝飯の 事見え、太筈、隨齋及び杉平泊の記事あり▼行脚 下總流山、馬橋地方
文化三年 丙寅 四十五歳		
一月	發句 四十一	隣家に招持されて新年の祝儀の膳に就けるを以ても其の貧窮の程想見さる 可し▼行樂 梅屋敷▼異變 三圍狐火を見る、青物町及び小網町出火▼俳 事 隨齋、閑齋會二▼行脚 下總流山、布川近傍

二月	發句 五十三	下總行脚中、駿河の俳人夢阿に逢ふ、一旦江戸に入りて再び流山に至り、月末歸庵す▼俳事 隨齋會二、其角百年忌
三月	發句 三十一	菊明時代その號を嗣げる故二六庵竹阿の十七忌を長應院にて營む▼異變 芝田町出火、淺草田甫に延焼し、二日目に至つて鎮火す▼行樂 起風と梅若參詣、耕舞と芝に行く▼俳事 閑齋、隨齋會二
四月	發句 四十一	深川八丁堀に住居す▼異變 下谷出火、地震あり▼行脚 下總布川及び小金
五月	發句 三十二	下總地方を経て安房勝山に至り、鯨の遊弋を見る、此の月行脚中に送る▼異變 金谷にて地震に逢ふ
六月	發句 二十二	相模浦賀に渡り、專福寺に參詣し、金川を経て歸庵▼異變 神田川出水▼行樂 山王祭見物▼俳事 隨齋會三▼訪客 太筇
七月	發句 六十五	四日市の火事にて書林松本平介、多年蒐集せる和漢書を灰燼としたるを惜みて文章あり▼異變 下谷御徒町及び豊鳴町出火、地震、▼行樂 市村座

八月	發句 四十二	見物、若一王子田樂踊▼俳事 今日庵元夢七年忌、隨齋會二、外一▼手抄大集經 下總行脚中田川にて丈左坊に再會す▼異變 兩國廣小路にて乞食三人鑓に刺さる▼行樂 龜井戸天神祭
九月	發句 三十二	本所相生町五ツ日に寓す。箴竹を取つて人の吉凶を占ふ、心可の病氣及び二竹の縁談、心願に就き易斷せる記事あり▼異變 相生町の庵近くにて盲人鑓にて突殺さる、本所三ツ目にて仲間體の者斬らる▼俳事 隨齋及び閑齋會▼訪客 下總の双樹、融州、常陸の起風等來りて宿泊
十月	發句 五十三	隨齋にて芭蕉忌及び會、嵐雪百年忌相當▼行樂 金澤法印等と菊見▲異變 地震▼行脚 下總地方
十一月	發句 三十五	肥後の對竹來る、成美にて歌仙あり、對竹次韻を試む▼行樂 品川岡本屋にて琉球人見物▼異變 濱町及び深川通出火、葺屋町出火にて兩芝居並に土佐肥前座等類焼す▼訪客 竹里來泊▼行脚 下總流山及び小金

十二月 發句 三十一

下總行脚に出づ、行徳、佐原より流山に至りて歸庵▼俳事 閑齋會

文化四年 丁卯 四十六歳

一月

發句 四十六

其日庵四世にして葛飾派入門より好意を寄せ居たる野逸歿す、その葬送及び追悼に就いて奔走に努む▼異變 本所番場太子堂より出火、千住出火、芝伊皿子臺出火、市川出火、芝新錢座出火、相生町一丁目にて旅人體の者財布を首に掛けて死す▼行樂 祇公と梅屋敷に行く▼訪客 下總の融州來泊、祇公、雲哉、其明、左櫻▼俳事 隨齋會▼行脚 下總流山

二月

發句 七十一

九月本所川生町にて盲人を殺害せる下手人、荒尾但馬守の手にて捕はる、京橋出火、地震二回▼俳事 其日庵初會、隨齋會▼訪客 其明來泊▼行脚 幸手不動院、下總小金及び田川

三月

發句 三十八

組鏡を買ひ宜長の管笠の日記の事を記しあり國學にも心を寄せ居たる如し▼異變 本所四ツ目附木賣夫婦縊死す、小塚原にて奥州無宿徳兵衛、新吉原遊女屋萬五郎等罪せらる▼行樂 春里、雨十と淺草めぐり、松井と日暮里に行く、双樹と方々遊ぶ▼訪客 竹里、來泊祇兵▼行脚 下總流山

十一月	發句 十三	輕井澤、上田、善光寺に一泊し、故郷柏原に入る、滞在九日にして出立し江戸に戻る▼手抄 漢書
十月	發句 九	下總行脚より戻り、「國に行かんとして心すゝます」ながら出立、大宮、深谷、安中に一泊し、碓氷峠を越ゆ
九月		同
八月		同
七月		同
六月		日記を缺く
五月	發句 三	八日以後の日記なし▼俳事 隨齋會
四月	發句 二十一	日記にも折々見えたる耕舜歿す。「柳澤勇藏今日葬」とあれば其の本性にや▼俳事 隨齋、閑齋、恒丸會▼行脚 流山及び馬橋

十二月

發句二十九

太筈及び隨齋會あり、下總に行脚し、江戸にて越年す▼異變 地震

文化五年 戊辰 四十六歳

一月

發句六十四

「庵前の板橋を盗まる」とあり、その翌日「盗み残りを盗まる」とあれば世路の險難、窮乏の甚しきを知るべし▼異變 大雪三尺

二月

發句四十七

「仙六來、菓子一袋」の記事、八日の日記に見ゆ、仙六は父の歿後に家産を争ひ居たる異母弟也、菓子一袋の一語意味深し▼異變 法恩寺前出火▼俳事 隨齋御免直會

三月

發句六十八

隨齋の上野角田川の花見及び六河彌陀千百年供養などにて、人並の春の行樂に浮かれ居たる如し▼異變 大南風一茶庵吹破らる▼俳事 閑齋、隨齋會六

四月

發句四十二

成美、浙江、宮根入湯の事あれば留守居がてら隨齋に寄食せるにや▼行樂 茅場町藥師、西本願寺▼俳事 心可没▼訪客 柏原の彌六來る▼行脚 下總流山

五月

三日以後の記事なし

一茶旅日記

甲^木 乙^火 丙^土 丁^金 戊^水 己 庚 辛 壬 癸

本所五ツ目愛宕別當

一 茶

書通所

大門通和泉町

京屋庄七

享和四年 甲子

正月大

今歲稱革命年 傳四十二年他國送星霜

上段の世の初日哉 旅の家

先あふ初日哉

一日 辛寅 午尅後天微曇 酉尅微雨

元日の寢 擧る程は曇る也

二日 晴

萬歳のまかり出たよ 親子連

住の江ものべつけにして 門の松

春立やよしのはおろか 人の顔

三日 晴

享和四年一月

享和四年一月

我庵の貧乏梅の咲にけり

四日晴

霞とてゑりは

鳥部山

五日曇寒風吹 甲越雪積一尺

ちる雪に立合せけり門の松
我くの顔も初日や御代の松
揚土を吹かたむらん春の風
捨杵のちよろく水や春の雨

兩國橋上看紫曙

○春立や見古したれど筑波山
田の人の笠に糞してかへる雁
とぶ蝶や溜り水さへ春のもの
六日晴

山の鐘も一ツひゞけ春の雨

我松もかたじけなさや春の雨

春雨やはや灯のともる亦打山

七日丁酉

あの藪に人の住めばぞ薺打

八日陰未ノ下剋雨

子曰惡莠恐其苗亂

惡まれし草は穂に出し青田哉

九日大風吹

十日陰 卯越東叡山御成 巳越還御 同日公侯伯子男有御佛參

太刀持も猛からぬ也梅の花

十一日陰 雨水正月中甲三刻ニ入

やぶ入の先に立けりしきみ桶

享和四年一月

享和四年一月

やぶ入の残りおほがる上野哉
やぶ入や先つゝがなき墓の松
十二日 鷺砂邑ヨリ川舟にて貢ス

庵の垣かちけ貌なる椿哉
椿迄見すぼらしさよ這入口
日の見ぬ竹の間のつばき哉

十三日 晴

十四日 晴

十五日 晴

十六日 陰夜雨

花椿頓て葎の門なるべし
三とせ見し梢の雨やかへる雁
雨だれの毎日々たゝく椿哉

十七日 曇

十八日 曇

十九日 辰刻ヨリ雪 登東叡山

袖すれば祟る杉ぞよ梅花

廿日 申刻ヨリ雪

廿一日 雪

○なべ一ツ柳一本も是も春

○春雨や穴もおかしきなへの尻

青柳のつゞくりみゆる夜明哉

家一ツあればはたして梅花

三足程旅めきぬ朝わか菜

○雨だれの有明やかへる雁

青柳の髓にみゆる夜明哉

享和四年一月

享和四年一月

○門口の灯かすみてかへる雁
青柳の先みゆるぞや角田川
油火に宵雨かゝる柳哉
是からは大日本と柳哉
歸雁見知ておれよ浮御堂
石ぶしやうら門明て夕涼
襪の世あみけぶりや青かつら
妙福の心あてありさくから麻
春雨や雀口明く膳の先
晝過の浦のけぶりや春雨
あたら日をふりなくしけり春雨

往年
嵐雪
木節

(8)

○草山のくりくはれし春雨
白壁のもつと遠かれ春雨
我戀はさらしな山ぞかへる雁
◎春雨のいくらもふれよ茶呑橋
柳見え東寺も見えて昔也
門の雁立日となりぬ日となりぬ
行雁やきのふは見えぬ小田の水
行灯におつかぶさりし柳哉
三筋程松にかくれし柳哉
立時もおくれはせじなやもめ雁
石白に月さしかゝる柳哉
垣添にゆて湯けぶりや春雨

享和四年一月

(9)

享和四年一月

看經もそこくにして花春
山里や藁たく度に梅が咲
三ヶ月に行ぬけらるゝ柳哉
たまくはよき人もきてつむわか菜
菊翳や窓のめをもる春の雨
ごの家根の窓が思ぞ猫の鳴
かざり焚やかまはぬ事に鳴鳥

成美
同
同
同道彦
同

廿二日雨

○門川の飯櫃淋しや草の蝶
懐へ入らんとしたる小てふ哉
○湖の駕から見えて春の蝶
七草を敲き直すや晝時分
○手のとゞく山の入日や春の蝶

(10)

廿三日雨

椿花春十ばかりほしげ也
○やぶ入やきのふ過たる山神樂
○行な雁廿日居れば是古郷
○兀山も見知ておけよかへる雁
○春のてふ山田へ水の行とゞく
○立雁のちろくみるや人の顔
近江のや雁のかへりも松の月

廿四日雨

◎片浦の汝よけ椿咲にけり
片くは椿で持し小家哉
是式の窓にも雁のなごり哉

享和四年一月

獨寝るつもりの家か柳陰

(11)

◎ほうろくをかぶつて行や春雨
身上としらぬけぶりや秋原
○叱られてそらから直にかへる雁
○歸る日もしらぬそぶりや小田雁
京人にせつちうされし櫻哉

廿五日 霽晴 北風吹

片扉おのれとあきぬ春の蝶
通り抜ゆるす寺也春のてふ
うとくくと雨降る中を春のてふ
川縁や蝶を寝さする鍋の尻
○あたふたに蝶の出る日や金の番
から下戸の片長家也春雨
○ひたすらに咲うでもなし門梅

初蝶のいきおひ猛に見ゆる哉

廿六日 雪零ル 午下尅ヨリ止ム 啓蟄二月節戌二刻ニ入

今上げし小溝の泥やとぶ小蝶
○行人のうしろ見よとや風のとふ
目の砂をこする握に小てふ哉

つれくニ云 此國のはかせの書おけるも古へのはあはれおほかりけり

廿七日 朝間雨零 信濃柏原 訪中村氏 及未刻 酉尅復雨零

跡立は雨に逢ひけりかへる雁
○行雁に吞せてやらん京の水
かへる雁翌はいづくの月や見る
京人はあきすもあらなん春雪
親の代の雨だれかゝる椿哉

廿八日 雨

享和四年一月

○六月のゆふべをあてやさし柳

○螢よぶ夜のれうとやさし柳

青柳や螢よふの思はるゝ

○こてくど鍋かけしわか菜哉

○青柳や世を白の目と籀かけと

無細工の西行立り柳かけと

六月の月のさせとてさし柳

廿九日 雪 由水來句

○朝雨を祝ふてかへれ小田の雁

柳にもやをらまけし葎哉

三十日 雪 復雨零

雁どもゝはみ残したよ野大根

○人よりも朝きげん也かへる雁

青柳ややがて螢をよぶところ

○一ツでも鳴て行也かへる雁

身じろきもならぬ塀より柳哉

雪七度 雨六度 風三度 曇三度

二月小 (二月十九日) 改元文化

一日 庚酉雨 午剋後雪五寸程

春雨やけぶりの脇は妹か門

笠からん柳も見なん妹が家

春もはや残りすくなや山の雨

川見ゆる木の間の窓や春の雨

文化元年二月

文化元年二月

二日 雨 從巳刻雪零 西灶大ニメ積一尺程

風俗やぶれかふれの粉雪哉

三日 雪 未刻後晴天

四日 晴

春雨の中に立たる榎哉

五日 晴

さが山に誰く寝ます春雨

春雨で戀しがらる榎哉

春雨もはやうるさがる榎哉

春雨になれて灯とぼる藪の家

いたづらに 人にかへる雁

六日 晴 夜雪

七日 在の平ハヘノヘノエヘノ喧嘩勝負ニシテ大気終

八日 日と花屋ノ家ニシテイハレノ中ニシテ

九日 晴 阿州徳島吉成百郎書通 去十一月十二日出彼國今日到來

塩賣が目に来たりけり冬構 三中

合點して冬待竹のしづか也 同

風過て冬の月夜になりけり 同

假初の月に親しき冬木哉 同

夕雲につゝかり鳴く千鳥哉 同

一番に舟に乗りたる寒さ哉 同

便所 カチ橋阿州屋舖内

森 惠 三 太

勝 瀬 東 作

又八丁堀屋舖

竹 中 一 平

心可同参三王子稻荷

東都のうしとらにあたりて、王子稻荷とて、かいわいこぞりて尊ぶとめる神

文化元年二月

文化元年二月

ありける。けふ梅隣とおなじくかしこに赴く。我わかゝりし時はにふの小屋
のみにして、たま〜老婆の茶を賣るありけりしが、年ふり事ははりて、上
たる流は魚とばしりに濁、鉦がなるかやの白引唄ハ絲竹の聲と變じて、只松
風うぐひすのみ昔にからはざりけり。

蒲公ニ飛くらしたる小川哉

陽炎によしある人の素足哉

十日 晴 辛牛

十一日 晴

十二日 晴 春分二月中今曉丑七刻ニ入

十三日 晴

十四日 雨

片山は雨のふりけり鳴雲雀
木曾山はうしろになりぬ鳴雲雀

夕急ぐ干瀉の人や鳴雲雀
踏残すせよよかたよ鳴雲雀
鳴雲雀人の貌から日の暮る
雉鳴て飯買ふ家も見ゆる也
ちり紙に漉込るゝな風のでふ
白魚と申もしばし角田川
○白魚舟一ツへりてもおぼる也
○白魚に松の旭のいらくし
雨だれの名ごりおしさよ花わかな
雲雀鳴通りに見ゆる大和哉
窓ニツくり抜ばはや雲雀哉
摘残る草の先より夕雲雀
○鳴雲雀貧乏村のどこが果

文化元年二月

文化元年二月

初 蛙 梢 の 雫 又 お ち よ
息 杖 の 穴 こ と く し 初 櫻
蛙 な く や 始 て 寝 た る 人 の 家
鍋 す み を 目 口 に 入 て な く 蛙
氣 輕 げ に 蛙 と ぶ 也 草 の 雨
油 火 の う つ く し き 夜 や な く 蛙
松 苗 も 肩 過 に け り 春 の 風
住 吉 に 灯 の と ぼ り け り 鳴 雲 雀
か つ し か や ご こ に 住 で も 時 鳥
十五日 曇
伏 水 の や 桃 な き 家 も な つ か し き
○ 掘 か け て い く 日 の 井 戸 か 巢 立 鳥
鳥 の 巢 の あ り く み ゆ る 榎 哉

十六日 雨

十七日 巳ノ刻後霽晴 曇天

十八日 曇

十九日 晴

廿日 晴

廿一日 晴

橘侯の別業なる太郎稻荷とて、去年の春より人のねぎ事かなへ給ふ神ましましけり。げにさるにてやありけん、ゆふもて作れる青旗、赤幟の藪を埋め、道せばむるばかりなりけり。

蝶 と ぶ や 春 日 の さ さ を 石 に 迄

東叡山

わか草に出當し日也寛永寺
長閑さや去年の枕はごの木根

文化元年二月

文化元年二月

老僧のけはくしさを春の山
こつくと人行過て花の
又人の立ふさがるや初櫻

○

○鳥の巢や突おとされし朶に又
おとされし巢をいく度見る鳥哉
鳥の巢や翌は切らるゝ門の松
◎巢の鳥の口明く方や暮の鐘
つゝがなき鳥の巢祝へあみた坊
○鳥の巢や吉備もきび逆本通り
○鳥の巢を見し邊りぞや山を焼
春風や翌行伊駒檜原山

廿二日 晴

人事ニ志賀山越せばはつ櫻
しるよしの郷の鐘なる柳哉
葭簣あむ槌にもなれし小てふ哉
初櫻はやちりかゝる人の貌
かつしかや昔のまゝの雛哉
花櫻咲かぬうちからおしまるゝ

エト

信輔

廿三日 陰 後小雨

廿四日 雨

廿五日 晴 北風吹

巢兆の婦人例ならぬ逆、乙二、道彦とおなじく千住におもぶく。かへるさ穩
坊の家をよ所に見なして、

文化元年二月

文化元年二月

わか草や誰身の上の夕けぶり
わか草に見るもつらしや夕けぶり
○口はたに春雨吹ぬ田舎館
わか草やわが身ならねど夕けぶり

廿六日 晴

月船と登東叡山

棒突も餅を賣りけり山櫻
御山はごこ上つても花の咲

廿七日

卯尅霞 巳刻後晴天清明 三月節辰四刻ニ入 日出ヨリ日入迄 晝五十二刻半 夜四十五刻餘 六
ヨリ六ツ迄 晝五十七刻半餘 夜四十二刻餘。

來年はなきものゝやうに櫻哉
袖たけの初花櫻咲にけり

初花や山の粟飯なつかしき
人貌は下り闇也はつ櫻
初花のあなたおもてや親の里

廿八日 晴 北風吹 夜丑三刻雨

廿九日 雨

○人事に志賀山越せば初櫻 (重出)

來年はなきものゝやうに櫻哉 (同)

○袖たけのはつ花櫻咲にけり (同)

初花や山の粟飯なつかしき (同)

人貌は下り闇也はつ櫻 (同)

初花のあなたおもてや親の里 (同)

四十九年見ても初花ざく哉
○菓子晝とる敷居際より董哉

文化元年二月

文化元年二月

○榎 迄 引 抜 れ た る 子 日 哉
 花 董 便 ない 草 も ほ じ ら る
 餘 の 草 の 引 か さ る 董 哉
 鳴 雲 雀 露 け き 垣 と 成 に け り
 蔓 草 を 引 か な ぐ り し 董 哉
 厩 菌 の 引 か ぶ さ り し 董 哉
 降 雨 や 汝 干 も 終 に 暮 の 鐘 哉
 ○汝 干 瀉 雨 し と く と 暮 か る
 む ら 雨 に 半 か く れ し 櫻 哉
 ○藪 入 よ 君 か 代 諷 へ 麥 の 雨
 降 暮 し く け り 春 の 山
 田 の 雁 の か へ る つ も り か 歸 ら ぬ か
 又 窓 へ 吹 も ど さ る 小 て ふ 哉

今 に ち る も の と 思 へ ざ 櫻 哉
 ○春 の 日 や 水 さ へ あ れ ば 暮 残 り

孫子謀攻篇

百戰百勝、非善之善者也 不戰而屈人之兵、善之善者也

○山谷詩 百戰百勝不如一忍

あ ら た め て 鶴 も お り る か 初 わ か な

三月大

一日 庚寅雨 午刻後天霽

○酒 あり と 壁 に 張 り け り 春 雨
 二日 辛卯晴 未上刻雷始起風雨

雷 に 鳴 あ は せ た る 雉 哉

文化元年三月

文化元年三月

三日 晴

中村氏、わか村氏と洲先の汝干に遊ぶ

汝干 瀉し かも 霞む は 女也

◎野 大根も 花咲に けり 鳴雲雀

○女 衆に 追ぬ かれ けり 董原

汝干 瀉女 の さいに 遠走り

女から 先へ かすむ ぞ 汝干かた

四日 晴

本草序云 眞語曰 常不能懂事上者自致百病之本 而怨咎於神靈乎 當風臥濕反責他人於失覆皆癡人

也 夫懂事上者 謂舉動之事必皆慎思

又土になりそこなうて花の春

◎見かぎりし古郷の櫻咲にけり

吹やらられくたる小てふ哉

○わが春ハ竹一本に柳哉

五日 晴

法華經 比丘比丘尼優婆塞優婆夷 翻譯名義集第一比丘名乞士淨淨活命故又云名含三義一破惡
ニハハ 二怖魔三乞士 又翻云除障比丘尼通稱ノ女爲ノ尼尼得ニ無量律儀ノ故應ノ次比丘 又稱ス阿姨優婆塞名ニ
信士男ニ優婆夷名ニ信士女ニ又云ニ淨々士……女ニ雖在居家持五戒男女ニ不同ノ宿故云ニ善宿男女ニ西域
記郵波索迦唐言ニ近事男ニ下略

篤音あざりは、わらはの時より紀の山深く入すまして、木の葉をつどり、溪
川を浴て寒暑をしのぎ、菓草の根に餓を補ひ、松風皓月に魂をさらし、雨露
霜雪に膚をきたへて春秋廿餘年、十六猿のために彌陀の御法をほごし玉ふ
となん。二月の頃より、又濁世の衆生度んとて下山ありける。彼土の鳥けだ
ものゝ名ごりおしくやあらん。別おしくやあらん。

聖人に見放されたる櫻哉

此日、此聖人、靈山寺にて教化し玉ふとて、貴賤羣集大かたならず。かゝる
文化元年三月

文化元年三月

折に通るかゝれるも、神佛の引合にやと道場に上れば、人の申にたがはず、結迦趺坐のありさまも凡人にかはれり。聲は瓢々と風の竹木を吹が如く、かかるさまは昔物がたりに見聞くのみ。目の前に逢ひ奉ることのうれしさよ。

雀子も梅に口明く念佛哉

七日晴

○土舟にちれご芳野の櫻哉

八日晴

七々叟と富岡八幡の開帳に詣、おく山にて

咲からに繩を張れし櫻哉

夕暮や池なき方もさくらちる

九日曇

角田川花見晝より雨

いつくは櫻の陰にまからん迎、前の日より打けはひて立出けるも、俄に空

かきくもりて、雨はしきなみ打ければ、たのむ木陰もつひにはもりて、或は衣のうら返してかつぎ、あるは敷ものをかざしつゝ、身重き人々、年に稀なる野遊の本意なくやあらん。

いづかたの花見なるべし野邊の雨

身の軽き我くの氣さんじなる、手の奴足の駕に任せて、雨が降うと、やりがふろうと。

◎花ちるや雨はかりても角田川

藪竹はよ程をれたに花の雨 成美

雨の日をよりも撰たり花の山
ふる雨に一人残りし花の陰
○大川へ吹なぐられし櫻哉

文化元年三月

文化元年三月

○本降りゆふべとなりし櫻哉
大降りや櫻の陰に居過して
人並に歸りもせでや雨の花
○咲くからに雨に逢ひけり花の山
十日雨

十一日 朝雨 巳刻後晴 夜戌尅微雨
ごこからの花のなぐれを角田川

春風の吹かぬ草なし田舎館
草越に江戸も見えけり花の山

十二日 晴 北風
鶏のなく家も見えたる汝干哉
折角の汝の干瀉をさゝんき雨
奈良漬を丸でかちりて花の陰

大川米中川屋

住吉や汝干過ても松の月
すげ笠の霞ますとても汝干哉
御寺から直に行るゝ汝干哉
董咲門や夜さへなつかしき
○花びらの埃流にふる雨か
はれくど御八ッ聞る汝干哉
○古郷の見えなくなりて鳴雲雀
十三日 晴 南吹

中村二竹古郷に赴けば、本郷追分迄おくる。

霞み行や二親持し小すげ笠
十四日 午の刻ヨリ雨

藤おるや草つく駒に片手綱 金令
舟木伐る聞さへ遅き日比哉 同
文化元年三月

文化元年三月

夕 櫻 ち り 出 て 又 新 也 一 蕙
古 郷 に く ら ぶ れ ば ち る 櫻 哉 乙 二
夕 雲 雀 野 邊 の け ぶ り に 倦 る べ ば
朝 漬 を 働 ぶ り の 汝 干 哉

十五日 晴 南吹

十六日 晴 南吹 未刻雨

◎袖 笠 や 水 見 て お は す 春 の 雨

○日 の 本 の 山 の か ひ あ る 櫻 哉

○董 咲 榎 も い は れ あ り と 云

十七日 雨

我 前 に 誰 く 住 し 董 ぞ も
誰 聞 し 軒 の 松 哉 董 哉
野 の 董 あ の 家 な く も あ れ か し な

葎 家 も 住 て こ そ し れ 董 咲

イセ物がたり

我ばかり物思ふ人は又もあらじと思へは水の底にもありけり

小 盟 の 貫 簀 は 青 し 春 の 風

春 風 の 夜 水 か ぐ り し 山 田 哉

地 車 に お つ び し が れ し 董 哉

我 前 に 誰 か 住 し ぞ 董 咲

汝 干 瀉 松 が な く と も 淋 し い ぞ

○春 風 や 黄 金 花 咲 む つ の 山

二 荒 嶺 も 黄 金 花 さ け 春 風

十八日 曇 夜小雨

十九日 曇 夜小雨

廿日 曇 夜大雨

文化元年三月

文化元年三月

廿一日 終日雨

梅若氏會出席

寢 仲 間 に 我 を も 入 よ 春 山

廿二日 雨

廿三日 陰 午刻後霽

ど の 木 で も 汝 干 見 ゆ る 筥 根 山

張九齡云 如下坂走丸

○ 寢 る 隙 の 今 更 お し や ち る 櫻

淋 し さ や 汝 の 干 る 日 も 角 田 河

福 蟾 も の さ ば り 出 た り 桃 花

廿四日 曇 酉刻雨

廿五日 晴 因^{フニニ}昨夜雨^ニ淺草觀音御成日延

ど ぶ 蝶 や 青 葉 櫻 も 繩 の 中

廿六日 晴 夜雨

兩國中村屋平宮方^ニ十歌仙有披露

花 櫻 一 木 く の い さ ま し や

廿七日 雨 晝より少晴 風化なとふ

廿八日 曇 寒風 立夏四月節酉六刻ニ入

廿九日 未刻ヨリ雨

卅日 晴

雨十七度 曇風四度

ど の 松 で 汝 干 見 よ う ぞ 筥 根 山

か くれ 家 も 人 に 酔 け り 春 の 山

江 戸 衆 に 見 枯 ら さ れ た る 櫻 哉

親 里 へ 水 は 流 る 春 邊 哉

國 々 は 櫻 人 に は 添 ふ て 見 よ

文化元年三月

文化元年三月

一日も我家ほしさよ梅花
吹けばとぶ住居も春は櫻哉○
賀

子雀は千代くくと鳴にけり
我庵は人も目かけぬ茶木哉
梅咲くや行よい門のいく所

四月小

一日 庚申

けふは雨降らぬと云ふ日なれば、富が岡の開帳かけて同行三人、ふと立出侍る。

年よらぬ心になりしわか葉哉

二日 雨

山形に寝ればなく也閑古鳥
こり須磨は古き烟りや時鳥
三日 雨 午下刻晴

角田川もつと古びよ時鳥
葎家もすぐ通りすな時鳥
一向に日まけは見えぬぼたん哉
糸屑もいとしがらすやぼたん咲
其松をいしり枯すな衣更
衣更松の木ほしくなりにけり
裕きて見ても淋しや東山
かくれ家やぼたんくるめに草原
菊の ㊦ せつてふしたりころもがへ

文化元年四月

文化元年四月

片道は付さふらふと裕哉
高砂は履も友をころもかへ
門淋し裕召す日の紙草履
瘦藪も窓も月さすころもがへ

四日晴

時鳥卵の花さへも持たぬ家
衣更抑藪の長者也
起くの扇つかひや竹根

五日雨

六日雨晝より晴南風吹

七日晴

小竹さへよ所のもの也とぶ螢
竹の月くとて扇哉

八日晴

鶏の鳴ぬ家なし夏木立
一人では手張畠や溢團

九日雨午刻より晴

榮順法印迁化

十日雨

○とぶ螢家のうるさき夜也けり
鉢植の一つほしさよとぶ螢
物さしのとどかぬ松や初ほたる
はたくとと螢とぶ夜の桶茶哉
消炭の見事に干たり杜若
旅人にすれし家鴨や杜若

十一日雨午刻ヨリ晴

文化元年四月

文化元年四月

行 く し ぎ こ が 昔 の 難 波 なる
行 く し ぎ こ が 葛 西 の 行 留 り
は つ く に 松 島 見 えて 行 く し
杜 若 低 い 花 に も 風 の 吹

十二日 晴曇

雷 の ご ろ つ く 中 を 行 く し

十三日 晴 小満四月中戌三刻ニ入

十四日 晴曇

十五日 晴

榮順法印葬式

い かけ し が ル 壺 こ ぼ す や 花 卯 木
初 松 魚 序 な が ら も 富 士 山
初 松 魚 山 の 際 迄 江 戸 氣 也

十六日 晴

十七日 晴

十八日 未刻雨

十九日 晴

三寸ばかりの蚊屋の切もて、紙帳の窓となす事のうれしく。

廿日 曇 村雨

文質して分を知らざれば盗か

おとろへて分をしらざれば病をうく

廿一日 雨

廿二日 曇 午刻晴

廿三日 雨 夜雨風

廿四日 雨 午刻ヨリ晴

廿五日 晴 戌刻ヨリ雨

文化元年四月

文化元年四月

廿六日 晴

廿七日 晴

廿八日 曇

卵の花や水の明りになく蛙
淋しさに蠣殻ふみぬ花卵木
卵の花に蛙葬る法師哉
卵花や葬の真似する子ごも達

廿九日 雨 芒種寅ノ八刻ニ入

雨十四度

五月小

一日 己丑 雨零 午刻ヨリ晴

○死ぬる迄見る榎とや澁團
○逢坂を四五度越えし團哉
二日 晴

院代來ル什物改

三日 晴 入梅

立合 與右衛門
鏡五郎

五月雨や彌陀の日延もきのふ迄
松の葉の丁と立けり百合花
五月雨の里やいつ迄笛法度
紫陽花の末一色と成にけり

四日 雨 午刻雨間

五日 未刻ヨリ晴

六日 雨

文化元年五月

文化元年五月

七日 晴 身投二人男女東橋に浮

八日 雨

風道を塞ぐ枝より螢哉

○翌は剃る佛の貌や夕涼

今植し草とも見ゆれとぶ螢

けしからぬ夕晴人やとぶ螢

二人とは行かれぬ厨子や五月雨

○灰汁桶の蝶のきげんや木下闇

けふも暮くけり五月雨

○五月雨や子のない家は古りたれど

○鳴鳥けふ五月雨の降りあくか

九日 晴

十日 朝曇 晴 流山ニ入 夜雨

○刀禰川は寝ても見ゆるぞ夏木立

二 番 火 酒 試 る う ち は 哉

○蚊 聲 の 中 に も 竹 の 月 よ 哉

夕 涼 み 蓼 ス リ コ 木 を 詠 む 也

皆 太 の 夢 や 見 つ ら ん 夜 の 蟬

聞 倦 て 人 は 去 也 朶 の 蟬

○雀 等 が 浴 な く し た り 蓮 の 水

木 に 打 て ば 竹 に た ら ざ る 流 哉

蟬 な く や 柳 あ る 家 の 朝 の 月

夏 菊 の 小 し や ん と し た る 月 夜 哉

仇 し 野 は 人 ごと に し て 夕 涼

✓ 朝 顔 の ま っ に 這 せ て 夕 涼

冷 し 瓜 二 日 立 て ぎ も 誰 も 來 ぬ

文化元年五月

友 賀

文化元年五月

葬の折角咲ぬ門涼

十一日 朝雨曇

十二日 曇

十三日 晴 申刻小雨 布川ニ入

十四日 朝雨曇

十五日 雨 夏至 五月中巳五刻ニ入 從日出至日入 晝五十九刻半餘 夜四十刻餘 從六時

々々迄 晝六十五刻半餘 夜三十四刻餘

窓だけに月のさし入る紙帳哉

蚊いぶしのき安さよ角田川

松の露ほちりくど蚊やり哉

蚊所と人はいへども流哉

十六日 午下刻雨 南風

小松菜の見事に生て蚊やり立

十七日 朝曇 午刻晴

○竹 笛は鎌倉ふりよ田植笠

初 鶏や爰か日比の米恩 菊輔

十八日 曇

十九日 晴

廿日 晴

廿一日 晴

廿二日 晴

廿三日 晴

廿四日 曇 夕雨

廿五日 朝雨

廿六日 晴

廿七日 寅刻地震

文化元年五月

文化元年五月

廿八日 晴

廿九日 晴

百合花朝から暮るゝけしき也
百合咲や米つく僧の藪白眼

六月

一日 晴 夜西上刻白雨

○目八分に拓の立けり夏羽織

二日 朝霧 田川ニ入

○薄羽織竹の夕を旨として

段々に夏の夜明や人の顔

○夏の夜やあなごる門の草の花

三日 巳刻ヨリ晴

大雨や大ナ月や松の蟬

○あばら家に入ると見えしよ日傘

僧正が野糞遊ばす日傘哉

啞蟬の二日降れし柱哉

○かくれ家は浴過けり松の蟬

鼻先のわら菌いくつ蓮の花

どの村の持とも見えす蓮の花

○青柳ははや夜に入て蓮花

木がくれに母のほまちの青田哉

一本もよ所の竹也夕納涼

汁なべも厠も夏の月よ哉

親の家見えなくなりぬ夏山

○うら町は夜水かゝりぬ夏の月

文化元年六月

文化元年六月

水切の騒ぎいつ迄夏の月

四日 晴 戌下刻 地震

五日 夜 白雨 六月四日出羽國由利郡地震ニヨリ込

萬葉

我宿の梅咲たりとつけやらば

こてふに似たり待ねともよし

月夜よし夜よしと人のつけやらは

こてふに似たり待すしもあれ

僧都が棄し菰を埋る

○下 京の朝飯時を日傘哉

六日 朝雨 午刻晴

龍臺沖つ隆生院といへる寺を左に見て 麻生龍角寺 大竹 松崎 北須賀 山田 平賀ニ入 田川より

三里也

一樂老の老婆身まかり、三日目也とて呑喰、大かたならず。

涼にもはりあひあらじ門の月

七日 晴 八里深堀ニ入

八日 晴 四里江戸ニ入

石原や照つけらるゝ蝸牛

○宵越の茶水明りや蝸牛

二森も清水も跡になりけり

清水溜る翌の山見て寝たりけり

茨ありて仰おかれし清水哉

◎うつくしき寢塵も見えて夕立哉

○松よりも古き顔して心太

○夕立や舟から見たる京の山

文化元年六月

文化元年六月

○湯も飯も過し法事や夏木立
一夜酒隣の子迄來たりけり
有明もさし合せけり一夜酒
あさがほの折角咲きぬ門涼

九日 晴

湖に手をさし入て雲の峰
○雪の峰立や野中の握飯
雲の峰小窓一つが命也

十日 晴

葎家は人種盡ん雲の峰
○百合も咲雲もはれけり卅日柿
松迄は月もさしけり湧清水

十一日 晴

十二日 晴

二筋はなくてもがもな清水湧

十三日 晴 申ノ刻雨戌ノ刻止 土用入

十四日 雨 巳刻晴

浅ぢふも月さへさせば清水哉

○夏の夜や人も目がけぬ草花
一人見る草の花にも夏の月

十五日 晴 山王祭

十六日 晴 日蝕九分

夏の月柱なで、も夜の明る
湧清水淺間のけぶり又見ゆる
かくれ家や月さゝすとも湧清水

十七日 晴

文化元年六月

文化元年六月

夕立や竹一本小菜畠

十八日 晴

十九日 晴

○なでしこの蒔をこなひも月夜也

廿日 晴 酉刻雨

今日去年花火屋 追善兩國大花火アリ

廿一日 晴 夜白雨 木更津延引

○小手前に住こなしたり夏木立

○待もせぬ月のさしけり冷し瓜

廿二日 晴 シヤウケン堀入 鹿出ル

ごの人も空腹顔也雲の峰

ひだるしといふ也雲の峰

舟板に涼風吹けごひだるさよ

虫のなる腹をさくれば雲の峰

八時木更津ニ入し時間也

廿三日 晴 南風吹

目の砂をゑひし吹入夏の月

廿四日 晴 南風吹

廿四日 晴 南風吹

廿五日 晴 南風吹

廿六日 南吹

大明塚明神夜宮参詣

廿七日 南吹 未刻雨

○蟲干や嫌し京を垣覗き

夏山やつやしくしたる小順禮

夏山や京を見る時雨かゝる

文化元年六月

文化元年六月

廿八日 大南吹 申刻雨 迂擇寺日中終念佛踊アリ

廿九日 雨 寒

卅日 晴 寒 時々雨

竹の月くさて扇哉

雨十三度

南風六度

闇夜の足音、誰かれとしるゝ是樂妙也

無縁寺の鐘も聞えて大花火

柱拭く人も見えけり夏の山

七月小

一日雨

雨だれや三粒おちてもけさの秋
門島のはれぐしさをよけさの秋
二日 晴 立秋七月節 丑四刻ニ入

日出より日入迄 晝五十六刻

富津ニ入

長松も手挫くや草の露

○秋立や身はならはしのよ所の窓

人は旅日は朝朗けさの露

人は旅見度なうても草の露

人は旅見なれし草や秋の露

人のなしたやうに思へけり旅秋

櫻咲里を眠て通りけり

アラノ夕楓

鬼獄 藏舟 蜀浦
文化元年七月

文化元年七月

あさ露のきほう折けんつくもかみ

いそかしき中に聞けり時鳥
ちらくくや淡雪かゝる酒強飯
釣雪
荷兮

小柑子 栗 賢魚

名釣てつほミの梅を折しけり
なでしこや蒔畫人を恨らん
玄寮
越人
笠をきて皆く蓮に暮にけり
古梵

立秋や旅止まくと思ふ間に
おく露やことしの盆は上總山

ギンホ 蝸牛也 上總

ソ、コ 上總

三日 晴 炎日病

四日 晴

五日 晴 南風吹

六日 晴 終夜大乘寺念佛踊

人の世や山の小すみもほし迎

八七 夕や都もおなじ秋の山

七日 戌刻雨忽晴

一雨颯々と過て軒霁、涼風おとづれて、木間月朗也。今宵星祭夜なれば二星の
閨情はいふもさらにして、世に人の祝大かたならず。

我星は上總の空をうろつくか
木に鳴はやもめ鳥や天川
あながちにかくれもせぬ小田雁
よ所事と思へくご灯ろ哉

文化元年七月

文化元年七月

是切の野分とはじな思れな
不平な垣もむくげは咲にけり
ちゝ母は夜露うけよとなでやせめ
垣際の足洗盥野分哉
○雁なくや平家時分の濱の家

信

土器のほごこし粟や草の露

八日晴

灯笼や消る事のみ先に立

九日雨巳下刻晴

十日晴陰観音参詣 尺牘爨材

十一日晴

十二日晴夕立

十三日晴夕立 炎日ニ憫サル、事凡十日

浴せぬ腕をさすれは秋風
仇し野の火の片脇におどり哉
去年迄は踊し下駄よ門の月
寝て聞くも今はうるさき踊哉
蜻蛉や二尺飛では又二尺
大沼や一ツ咲ても蓮の花
十四日夕立

○おごる夜や赤坂陳の後の松
山かげの一軒家さへおどり哉
うろたへな寒くなる速赤蜻蛉
山里やおどりもしらで年のよる
○とかくして松のこといふ玉迎

文化元年七月

文化元年七月

飯 過 や 涼 ミ が て ら の 玉 迎
○みそ萩や水につければ風の吹
迎 鐘 ならぬ前から露のちる

十五日 晴

十六日 晴 夕立

大乘寺地獄晝

○秋の風 劔の山を來る風か
○秋の風 我は參るはごの地獄

足引の劔の山にむかふ身の

うき世に残る子や思ふらん

おごる夜や淺間の砂も廿年

十七日 アヤ竹 南吹 夜大雨

十八日 雨徒 晝晴 夜雨

○朝顔や藪蚊の中に入りんとして
迎ひ鐘ならさぬ前のゆふべ哉
うら町の曲りなりなるおどり哉
二人とは行れぬ町におどり哉
うかくと盆も過たる灯ろ哉
十九日 巳下刻ヨリ雨

文迂禰淵碑文

文迂 柳 莊

凡儀、與ニ秋月ニ齊レ明 音徹、與ニ春雲ニ等レ潤

○夕風や木のなない門の高灯籠
廿日 雨

寝る外に分別はなし花木槿
廿一日 曇 夜雨

薺の葉がくれ木間がくれ哉
文化元年七月

文化元年七月

赤紙のちさい草履を玉迎
二足迄赤い草履を玉迎

廿二日 晴 夜雨

秋の風乞食は我を見くらぶる
あのやうに我も老しか秋のてふ

廿三日 雨 文章小成七册

廿四日 晴

門先やけさはかゝしもあちらむく

留別

秋の風蟬もぶつぐおしと鳴
五六日 居過す門や草の花

廿五日 晴 江戸ニ入 酒鞍源五郎舟

○松苗のけはくしさよ秋の風

梅の花我家にてはなかりけり

何祭か祭霧の遠里小野哉

○朝霧の皆迄はれな小菜畠哉

山霧のかゝる家さへ祭哉

廿七日 晴 南風 隨齋會

目のの申分なき夜露哉

大雨の上り口也青瓢

雨三粒おちてもぬれし瓢哉

○さらし晝にありたき袖よ瓢むく

闇夜に段くなるぞ種瓢

なけ鶏邪魔なら庵もたゝむべき

廿八日 晴

廿九日 曇小雨 晝ヨリ晴

文化元年七月

文化元年八月

川をへだて、おせ、をもて、舟よく、が氣にかゝる

不二の御山に白く、めくは、参り道者か白鷺か

あまりよい子はもたぬが、まよ小豆三斗まへあらされた

あや竹に鳴合せたるいと哉
盆の月木綿裾のうれしいか
秋風や手染手をりの小ふり袖
あや竹の袂の下を秋の風
今めかぬものをアヤ竹赤草履

雨十一度

笑ふ星ありうらむさまなり皆それ、哀樂はかの思にありて祭らる、星なるべし

八月大

一日 曇 蒔志會

丘の家 きぬらし笛を吹
そばの花二軒前程 咲にけり
松苗も風の吹く夜のしん酒哉
やぶ陰も月さへさせば我家哉
我もいつあのけぶりぞよ三ヶの月
二日 晴

○おごる夜や水にのがれし門板
三日 晴 戌二刻夕立 鬼坊主清吉といへる賊

賣馬の親かへり見る秋の雨
秋の雨乳ばなれし馬の關こゆる
さはつても時雨さう也ちぶ山
鹿鳴くや日は暮きらぬ山の家
さをしかかの鳴ても暮る、山家哉

文化元年八月

文化元年八月

秋雨やさのみさし出ぬ山の家
さをしかや戀初てより山の雨
丘の邊や人にたよりて鹿の鳴
鹿鳴や雨だれさへもちぶ山
○なら坂やしぶとい鹿も夜の雨
撫られに來りし鹿か丘に鳴
雨風にしすましげなるのぎく哉

タワイナシ年

鳥のねも我國でなし野菊咲
山里や秋の雨夜の遠歩き
秋雨や我にひとしきかたつぶり
今鳴は逢ひし鹿かよ立田山
○鹿聞のぬけく九人もごりけり

蜩の遠く鳴く也馬の上 鳥笑
ごの雁も低く鳴く也うしろ窓 同
五日 晴 駿河臺ニ入、吹かけ雨
六日 水馬御成人留

十時庵出會

龜田文左衛門 鷗齋
藍田義左衛門

寺喚き夕アではなし萩の花
もの足らぬ夕アや芒穂に出る
荒駒も糞打きせて淋しいぞ
日ぐらしや柳見てさへうつとしき
○草花や行よい門のいく所
野のけぶり袖にぞ這る夜寒哉

野松
胡準
梅壽

文化元年八月

文化元年八月

兄分の門とむきあふ夜寒哉
先住がめでし榎も夜寒哉
◎朝寒や松は去年の松なれど
悪い程松うつくしき夜寒哉
○そばの花咲や佛と二人前

七日 吹雨 河内屋ニ集光會

八日 晴

九日 晴 夜俄見物

秋の夜や人にすれたる天乙女

九日 曇 申刻雨

秋の風藝ナシ狙も夜の明る

十一日 雨

十二日 晴 閑齋

○名月や後にして行あさち原
○としよりの仲間に入らん月よ哉
雨好の灯のさぼりけり萩の花
小笠きて東坡めく也萩の花
むら萩や古井がなくも小淋しき
各月や石のあはひの人の顔
名月や都に居てもとしのよる
名月や誰くばかり去年の顔

ゲドル シラス 名折レ

十三日 晴

秋雨や餉 かは宇治の山

十四日 晴

十五日 雨

文化元年八月

文化元年八月

名月や雨なく見ゆるよ所の空

十六日 晴

二竹しなのへかへる

有明やささらしな山も通りかけ

隨齋茶はんあり

十七日 晴

足元に日のおちかゝる野菊哉

うらの山しぶとい鹿も交るへし

はなやかに旭のかゝる野菊哉

十八日 曇 風雨

御秘藏の葛三筋程秋の雨

松苗にわざとならざるの菊哉

十九日 雨 晝晴 酉刻又雨

爪先の冷たしといふ野分哉

僧も立鶴も立たる野菊哉

鶴下りて一倍寒きのぎく哉

しなのちはそば咲けりと小幅綿

紅葉ばもそしらぬふりや男鹿

葛紅葉朝から暮るゝそぶり也

鶴を待起なれやあしの花

かつしかや遠く降ても秋の雨

淋しさを鶴に及すかゝし哉

廿日 曇

廿一日 曇

廿二日 曇

廿三日 陰

文化元年八月

文化元年八月

廿四日 陰

廿五日 雨 木挽町神樂島見物

廿六日 雨

廿七日 村雨 流山に入

落椎のあくまでぬれし旭哉
おく露になつかしからす榎哉
秋の夜や隣を始しらぬ人

廿八日 雨

秋の雨松一本に日の暮るゝ
○山霧と一ツゆふべの都哉
○秋霧や河原なでしこ見ゆる迄
笈士の又も下れよ深山霧
秋雨やいたゞく桶もなれぬ顔

越後節 藏に聞えて秋の雨

祇兵のとなり屋敷に蟲のおほく

焼原やはやくも鳴しきりくす
その草はむしり残すぞ蝥
稻こきの相手がましき家鴨哉
稻かけし夜より小藪は月夜哉
菊の花咲せる迄の板屋哉
○きりくす隣に居ても聞えけり
あさがほのすがるゝ迄に鳴子哉

廿九日 雨

卅日 南吹 利根出水 巳刻雷雨

雨十五度 曇七度

○ほつくと瘦ケイタウも咲にけり

文化元年八月

文化元年九月

瘦土にほつゝ菊の咲にけり

九月

一日 晴 亦洪水加二尺

根本といへる邑の入樋より切込

○薺やたちろぎもせず刀禰の水
 ○赤椀は種はかるらん野分吹
 ○あけぼのや吹古されし女郎花
 ○うきくど草の咲そふ瓢哉
 かはるく草花過し瓢哉
 鳴子から先へぬれけり窓の雨
 最う古いかゝしはないか角田川

見覺て鳥の立らん大瓢

このかた

女郎花仁和の御代も野に咲か
 蔦紅葉口紅つけし庇也
 豆蔦もまけぬ氣になる紅葉哉
 妹が家は跡になりけり花の原
 うかくと出れば日暮る紅葉哉
 それ切にしてもよいぞよ薄紅葉
 うかくと出水に逢し木槿哉
 なまじいに鳥來ぬ前の紅葉哉
 松切に鳥も去けり夕紅葉
 しひて来る鳥とも見えぬ紅葉哉
 なまじいに植たてしたり菊の花

文化元年八月

文化元年八月

、女郎花さしでがましく咲にけり
、待人もごころにあるか雁いそぐ
雁鳴や一夜もほしき田一枚
、小田雁畠の月夜や庵ほしき
我とても假の宿りぞ小田雁
雁鳴にゆるりとかさん畠も哉
畠持たばよそにはやらじ雁鷗

二日 晴 赤洪水加六寸

水はいよく増つ、川添の里人は手に汗を舉り、足を空にして立さはぐ。
今切こみしごの入樋、彼の堤ごあはれ風聞に胸を冷して、家くのおごろき
大かたならず。

魚どもの遊びありくや菊の花
○夕月や流れ残りのきりくす

○我植し松も老けり秋の暮
三日 日 晴 布川ニ入

宮新田半右衛門とかやいへる家に、年古く老さらばへたる男ありけり。晝餉
のれうの助せんと火を てん比しも、南風はげしく、忽火烟竹木を埋む。翁
は聲をかぎりによべご、家の子は耕作に遠くにおもぶき、里人は稀の秋日和
なれば、なべて人少く、わが家はめらくごごもえける。あはれ妻のもごりて
手の前、足の踏み所うしなふべし。きのふは洪水のかなしみをよそに見なし
て、けふは火災のなげき我身にかゝる。實うき世の哀樂は、瞬の間も待す。
十とせ勞してふやしたる器財も、只一時の灰となる。我も人もおそれつゝし
むべし。

やけ石や夜寒く見えし人顔
着残したた給す菊の花
やけ石に腰打かけて秋の空

文化元年九月

文化元年九月

それが木も家尻に見えて梨を賣る

五日曇

六日曇

七日 晴 押つけ村ニ遊

そのかみ天和の比となん、鶴を殺して從類刑せられし其屍を埋し跡とて、念佛院といへる寺あり。二百年の後に聞さへ魂消るばかり也。况縁ある人においておや。

見ぬ世から秋のゆふべの板哉

植足しの松さへ秋の夕哉

八日曇

末枯や木辻も古き山つゞき

あさぢふや茶好になりて朝寒き

深川の家尻も見えて朝寒き

○青梧の見れば見る程夜寒哉

兀山も見棄られぬぞ小夜砧

小夜砧菰きて蘇鐵立にけり

身祝の榊もたてて砧哉

近い比別れし家や小夜砧

手比なる竹ねぢふみて遠砧

笠はきれば我さへゆかし遠砧

さる程に五兩の松も夜寒哉

菊蘭につゝと出たる葎哉

手序に松をもいぢる菊花

半日も見ておはさぬぞ菊花

なよ竹も植交ゆべし菊花

箕をかつぐ人と連立紅葉哉

文化元年九月

文化元年九月

魚汁のそばしる草も紅葉哉
 木啄も日の暮かゝる紅葉哉
 柴門の藪の中迄小菊哉
 遠砧榎を始夜の秋
 常體の山とは見えぬ砧哉
 穰多町も夜はうつくしき砧哉
 白菊に拙き手水かゝる也
 よもぎふや袖かたしきて菊の酒
 九日朝雨晴
 九日にもさし構なし菊の花
 十日曇村雨
 雨落に見れば合せてたり草花
 青梧の見れば見る程夜寒哉

(重出)

一の湯は錠の下りけり鹿の鳴
 近い比しれし出湯やそばの花
 鹿鳴や竈しらぬ北山家
 紅葉ばにま一度かゝれ今の雨
 ちり塚も夜はうつくしき砧哉
 雁鴨も武ばり顔也カサイ筋
 豆殻のはちりくど野分哉
 鹿鳴かぬ山さへ古き大和哉
 鹿の音に木辻も只の在所哉
 晴れヌ間又も聞せよ今の鹿
 ○刀禰川の下り口作る野分哉
 山本の祭の釜に野分哉
 ほつくと馬の爪切る野分哉

文化元年九月

文化元年九月

○鹿鳴や旦の森のひとりねに
秋霧やあさちを通る水戸肴
仰山に霧のはれり附木突
不揃な家を目がけて来る雁か
姫松のけむくしさよ鳴の立
人は年とるべきものぞ鳴の立
檜桶手からも霧は立にけり
○檜さす手からも霧は立にけり
○今しかと逢ひし人ぞよ鳴をつく

十一日 未刻雨

ばさくくと木曾茶をはかり秋雨
我のみか山もふりゆく秋の雨
鳴鳴や鶴はいつもの松の上

十二日

手の皺の一夜に見ゆる秋の雨
秋雨や人げも見えぬうらの門
鳴立やいつの御幸の筏ぞも

はへ子ひとつの比及となん、木おろしの畫師なるもの、布川里なる何かしの娘、男女はかりて三月の粕など貧しからざる程、舟につみつゝ川霧おひたる夜の紛れに、鬼一口のうれひもなく、いづちへか漕うせしとかや。うつり心の一筋ニ露と消んだいへる、淺はかなる心とは見えす。米みその類迄たらはさる事なければ、さながら彼大福長者の老をやしなふ工夫に似たり。もし戀の道におほやけあらば、是等ハ重罪人なるべし。
かぢ枕とまもる月に久かたの

霧へたつともおやは忘るな

十三日 晴

文化元年九月

文化元年九月

利根川の秋もなごりの月よ哉
 けふもく鳥の番也二角力好
 死所もかなりに荒て鹿の鳴
 咲かゝる草の邊りに角力哉
 秋の夜やよ所から來ても馬の嘶
 出る度に馬の嘶く夜永哉
 山見るに片ヒザ立て夜寒哉
 スリコ木もけしきにならふ夜永哉
 秋角力初る日から山の雲
 人過て夜は明かねて亦打山
 秋の夜の袖に古びし柱哉
 うら門のさまはいかにも夜永哉
 サガ山の這入口より菊の花

十四日 晴

、笛 吹 て 立 人 お は せ 青 瓢
 、瘦 山 には つ か 咲 け り そ ば の 花

十五日 晴 布川祭

今夜は鶴殺しの追夜なりとて、念佛院に其回向あれば、かいわい群集大かたならず。天和より四萬三千日ニあたるとなん。比しも秋風寂々として小田の雁さへ昔おもはれて、
 我も念佛一遍のたはむけなす員には入りぬ。

地内にて

君 か 世 や かゝる 木 陰 も ば く ち 小 屋

十六日 曇

下ふさ布川の人となん、男女私にちぎりあひ、古郷はうしろになして、おなじ國成田といへる里にしるよしありて、しばし忍び居たりけり。さてしも棄べき事ならねば、よく物をかき、よく物を見る男等をやどひつゝ、ほごなく

文化元年九月

文化元年九月

二人を得てかへりぬ。今はおのれしれる月船の宿をやごして、夜も晝もくらしける。おのがちゝ母の家も遠からざるにわらひのゝしり、更にはづらふと色もなく、人のせざるわざなし。みづから手柄顔ニふれ歩くこそいみじけれ。異國ニ桑中に待、きのほとりにおくといへるも、かゝる風俗なるべし。

十七日 雨

十八日 晴

瓜先にいく日馴たる木實哉
、門口の木實に見るや木曾の雨
くやしきも過し山邊や木實降
ちる木實赤ふんごしがうれしいか
、はつくくに親里見ゆるかゞし哉
○かゞしさへ千代のためしや姫小松
今立しかゞしなれども

、姥捨し國に入れり秋の風

十九日 晴 流山ニ入

廿日 晴 江戸ニ入

廿一日 晴 樂姫様江戸御入與

、菊島やさらし画に見し上わらへ

同日土佐座操見物

志賀人の

廿二日 曇

○我時はふさはぬ家や菊の花
○たやすくも菊の咲けり川の縁
廿三日 晴 王子行

濁る程大根洗へ秋の水 浙江

文化元年八月

文化元年八月

錢車もて糸とるまなびする、うなひも田舎ぶりてめづらしく

、菊の寝たなりに日のさす首哉

貧交

、すりこ木もけしきに並ぶ夜寒哉

(重出)

、朝見れば夜寒げもなし次の宿

○蒔捨の菜のうつくしき夜寒哉

、向ひでも片ヒザ立る夜寒哉

○檜葉の朝からちるやとふ

揚土にくつつ付初る木葉哉

、汁の實の見事に生てちる木葉

廿七年家なくして野に寝さるも君が代なるべし

廿四日 晴

廿五日 晴 夜雨 羽左衛門座見物

廿六日 雨 晝ヨリ晴

祇兵とともに、相生町見に行かへるさ、兩國茶店にて

、橋見えて暮かゝる也 秋の雲

廿七日 隨齋に出席 晴

ふる雨も小春なりけり 智恩院

○麥ぬれて小春月夜の御寺哉

冬かれや禰宜のさげたる油笛 落梧

廿八日 村雨

飛螢松にハよける風情あり 夏江

曉の色にはなれぬなでしこそ 鷺宵

廿九日 曇

元三大師御迂宮拜ミに、祇兵同道して

文化元年九月

文化元年十月

末枯やむごひ直踏の柱員
蓮葉の青きも見えて初時雨

腰かけて榎としるや秋の暮
祇兵

十月

一日 晴 蕙志亭會

○冬籠 其夜に聞くや山の雨

二日 晴 東叡山御練拜見

三日 晴

四日 晴

五日 晴

○しくれねば夜も明ぬ也片山家
鍋ぶたものべ付にしてかれの哉

世路山川ヨリ嶮シ

木がらしや地びたに暮るゝ辻諷ひ

六日 時雨

、小襖にかれのゝ雨のかゝる也

枯原の雨のひゞきし枕哉

夜くは寢所の下もかれの哉

野はかれて何ぞ喰たき庵哉

○麥餅のいく日立ぞよかれの原

七日 晴 夜雨

八日 晴 夜雨

九日

文化元年十月

文化元年十月

十日 晴 高橋ニ入

十一日 晴 流山ニ入

十二日 晴 小金 翁會 布川ニ入

芭蕉忌に先つゝがなし菊花

十三日 晴 布佐操見物

十四日 雨

、ちらぬかど木槿にかゝる木葉哉

萩菊や霞ちる日に咲合

、畠の菊折角咲けば木葉哉

はらくと木槿にかゝる木葉哉

○雨ふれど一本残る大根哉

十五日 雨

ちる紅葉水ない所も月よ也

川下は誰くが住ちる紅葉

立田川流る、水もこの比は

ちる紅葉ゆへおしくそありける

慈圓

窓近く葉かへぬ竹を植置て

友なき宿と人にいはれし

家隆

古郷の老の寢覺になく鳥も

おなし昔や戀しかるらん

、有明や窓の名残をちる紅葉

十六日 晴

十七日 晴 田川ニ入

秋の日やかへらぬ水をなく鳥

十八日 雨

十九日 晴 田川ニ入

廿日 晴 江戸入

文化元年十月

文化元年十月

廿一日 晴 家財流山ヨリ來

、見なじまぬ竹の夕やはつ時雨
、寐始る其夜を竹の時雨哉

廿二日 朝雨

廿三日 曇 逢雨十

廿四日 申刻ヨリ雨

廿五日 晴 血雨十詣淺草觀音

、散木葉ことにゆふべや鳩の豆
、木がらしの吹留りけり鳩に人

おく山茶店にて

、初紅葉どれも榎のうしろ也

正統寺にて

、散紅葉流ぬ水は翌のためか

廿六日 晴 北風 金令會出席

廿七日 晴 隨齋會出席

麥の葉の夜はうつくしや千鳥鳴

○片壁は千鳥に任す夜也けり

廿八日 晴 壁張

廿九日 晴 壁張

卅日 晴 せうし張 雨八度

○麥の葉は春のさま也なく千鳥
久木 おふ片山かげや鰻汁

十一月

一日 晴

木更津大火
元貞ニ逢ふ

文化元年十一月

文化元年十一月

、木がらしに三尺店も我夜也

二日 雨 菜園來

三日 朝雨 元貞來 越後新潟玉之來

君子和而不同

○なよ竹や時雨ぬ前もうつくしき

小人同而不和

おし鳥よ一夜放れて戀をしれ

大江丸

四日 晴 大霜

大霜の古家も人の地内也

五日 晴 文山講釋アリ耕潤宿

六日 晴

七日 晴 其寛來

八日 晴 角力始

九日 晴 耳童來ル

冬 構 蔦 一 筋 も 榮 耀 也

十日 晴 夜丑刻中橋出火

老樂の重る年はかくすども

頭の霜に顯れにけり

十一日 雨

十二日 晴 耕潤宿 聞文山

十三日 晴 北風吹

あはれなり雲井のよ所に行雁の

かゝる姿になりぬと思へは

夕雨を鳴出したたりみそさざい

文化元年十一月

文化元年十一月

けふもあゝといふ日みそさとい

十四日 晴

はつ雪や竹の夕を獨寢て

、それがしも雪を待夜や欠土鍋

蕪一つ翌の時雨ぞ門畠

○初雪や人出ぬ前の湯立釜

○初雪や古郷見ゆる壁の穴

初雪や山田のかゝし老もせず

鰻提て京の真中通る也

十五日 朝雨 双樹へ文通

十六日 晴 宿石原

十七日 晴

十八日 晴 夜雨

十九日 晴曇

廿日 晴 松井來 炭一俵送ル

廿一日 晴 夜丑四刻田所町出火

廿二日 晴

廿三日 晴

廿四日 晴 富次郎來 油買

廿五日 晴 好潤來ル

唯女子ト與ニ小人ニ爲レ難レ養レ養也 近レ之不遜遠之則怨

鳥どもに糞かけられし柳哉

廿六日 布子 夜八ツ時小網町出火

はつ雪や翌のけぶりのわら一把

木がらしやこんにやく桶の星月夜

◎木からしに口淋しいとゆふべ哉

文化元年十一月

文化元年十一月

木がらしや小溝にけふる竹火箸
かゝる夜に椿火をふけ鯨汁
炭俵はやぬかるみに踏れけり
○槽の火や目出度御代の顔と顔
○みそさゞひちつといふても日の暮る

廿七日 晴 隨齋會出席

はつ雪や其角が窓も見えて降る
、寝たなりは櫻としれしけさの雪
はつ雪に白湯すゝりても我家哉
雪の日も蒙求しらぬ雀哉

女三宮姉小野

初雪やおち葉の宮とごこをいふ

廿八日 晴

鉢 敲 今 の が 山 の 凹 ミ 哉
宗 鑑 が と ふ は も 見 た か 鉢 敲
西 山 は も う 鶯 か は ち 敲
京 を 出 て 聞 直 さ う ぞ は ち 敲
○ し ば し ま て 白 髪 く ら べ ん 鉢 敲

とふは(塔婆)

廿九日 夜雨

卅日 晴 申刻ヨリ風吹 其寛來ル

雨四度 夜雨共五度

師走

一日 晴 隨齋會出席

、越垣の人 に 答 る 火 桶 哉

(垣越)

文化元年師走

文化元年師走

二日 晴 炭口切 月船來ル
せんたく三十疋

三日 晴 兩國川氷 月船來ル
夜戌刻小川町出火

冬の梅目も當られぬ月夜也
役ごしと申間に暮にけり

(厄年)

四日 晴 机買 其寛來

五日 晴 朝雨 油買 常南來ル 五岳來ル

○梅見ても青空見ても田舎哉
先以梅の咲けりくらま口
、咲日から梅にさはるや馬の首
此當り洛陽なるか梅の月
、梅の月牛の尻迄見ゆる也
、五六月留主にして見ん梅の花
梅咲や去年は越後のあふれ人

、ちる梅のかゝる賤しき身柱哉
、いたいたげに梅の咲けり本通
むづかしやだまつて居ても梅は咲
つゝがなく下山なされて梅の花
○神好の家のそぶりや梅の花
、正月やよ所に咲ても梅の花
○赤貝を我もはかるよ梅の花
あれ梅といふ間に曲る小舟哉
、梅の木は咲ほこりけりかけ硯
大原やふらりと出ても梅の月
、梅咲くや木を割さへも朝けしき
、片店のわらじも春や梅の花

身柱(ナリケ)

六日 晴 金令納會

文化元年師走

行年もかまはぬ顔や小田の鶴

七日 晴 隨齋臨時

○粥杖に撰らるゝ朶か小しほ山

○鶯よこちむけやらん赤の飯

有明や雨たちおつる千鳥なく

○春の夜や瓢なてゝも人の來ル

、寒菊にせき立られし梅の様

寒菊や白の目切がぼんのくぼ

八日 晴米

九日 晴 布川元貞來 其寛來

來るもくも下手鶯よ窓の梅

、窓あれば下手鶯も來たりけり

○鳴おるやサガの鶯もどりがけ

十日 晴

鶯ももどりがけかよおれが窓

神國の松をいそなめおろしや舟

春風の國にあやかれおろしや船

十一日 晴 月代

門の松おろしや夷の魂消べし

日本の年かおしいかおろしや人

十二日 晴 足帝 夜戌刻ヨリ雨

十三日 雨

十四日 雨 亥刻雷鳴

艱心莫レ善ニ於寡ニ欲

寢所はきのふ荒けり初時雨

十五日 晴 月蝕皆既

文化元年師走

文化元年師走

十六日 晴

正月の待遠しさも昔哉
 春を待つもりて居かあみた坊
 大年のよい夢見るかぬり枕
 鶴好の人さへ年は暮るゝ也
 竹植し欠すりばちや春待と
 ○年おしむ人と等しき枕哉
 ○春立や四十三年人の飯
 、我宿は蠅もとしとる浦邊哉
 十七日 晴 淺草市ニ遊
 年の市何しに出たと人のいふ
 人並に出る直似したり年の市
 、月さすや年の市日の乳待山

十八日 晴

梅がゝやおろしやを這す御代にあふ
 、瘦藪の下手鶯もはつ音哉
 十九日 晴 閑齋會出席

誰など獨り寢に來よ梅の雨
 廿日 晴

髪虱ひねる戸口も春野哉
 廿一日 晴 油 立川通御成

梅かゝやごなたが來ても欠茶碗
 野松來 冬扇來

廿二日 雨 心可ヨリ餅配

年の市何しに出たと人のいふ
 廿三日 晴

(重出)

文化元年師走

文化元年師走

廿四日 晴

父母恩慈經

其子發聲如聞音樂

膝の兒の指始梅の花

小兒在胎内乳百八十石

○しぐるゝや生れぬ先の門板

足癖のあさちか原や春の雨

月見よと引残されし小松哉

廿五日 雨 野松來 夜丑刻雷 始雪

廿六日 晴 鎌倉圓覺寺教導日本橋に晒

玉の盃そこなきがごときといへど、色好むは人性にして、好ざるは獲麟よりも稀也。あるは染ごのゝ姫を思ひ、又ハ物洗ふ女に迷ふ。やごときなき僧正、雲に住山人すら此一筋は踏どめがたくやありけん。僧教導は佛道のいさほしも

九五近き身の戒を破りし罪となん。巷に面をさらさるゝよ所目さへいとをし
く、にがくしくぞ待る。

雪汁のかゝる地びたに和尚顔

淋しさは得心しても窓の霜

うしろからぼろを笑ふよ梅の花

雑なくや千島のおくも佛世界

選當し庵に寝ても師走哉

○時雨や前見し家は先の澤

行水のかへらぬ年の一夜哉

廿七日 曇 鍋買

廿八日 雪 米買

、降雪にもつたいななくも枕哉

降雪もはりあひなれや葉竹賣

文化元年師走

文化元年師走

ふるは雪隣りも同じ手鍋也
門松の立初しより夜の雨
梅さくに鍋すみとれぬ皺手哉
袖だけの垣根うれしや春の雨
廿九日 雨味憎 間人死挽歌

正月を待し窓哉枕哉
卅日 晴 富次郎餅配り來ル

○前の人も春を待しか古壘
雨六度 雪一度
春十九句

文化二年 丁丑

正月

一日 晴

心可と佃島住吉の旭おがみに行く

年立や日の出を前の舟の松
欠鍋も旭さす也是も春
二日 晴 富次郎 傳吉來ル

鳥なくや野老壘もお正月
三日 晴

わかなのや一葉摘んでは人をよぶ
わが春やタドン一つに小菜一把
草蒔や肴焼香も小晝過

文化二年正月

文化二年正月

蒲焼の香にまけじとや梅花
袖口は去年のぼろ也梅の花
我袖も一つに霞むゆふべ哉

彼視三釜三子鍾 如雀蚊虻相過

金のなる木のめばりけり穢太か家
梅の木に立はたかるや供の人

四日雨

五日晴 二竹來ル

六日晴

棒先の茶笈かはくや春の風
我庵ハ蝶の寢所とゆふべ哉
○かりそめに出て霞むやつくば山
家形に月のさしけり春の水

、夜明ても臙也けり角田川
○袖かざす御公家もおはせ春の水
、庵椿見すぼらしくはなかりけり
椿花思ひし程は古びぬぞ
牛の子の顔をつん出す椿哉
、片里や宿なし乙鳥暮いそぐ
乙鳥もことし嫌ひし葎哉
乙鳥や叟が膝はふすぼれと
○乙鳥や野べは先麥先小家
七日晴
八日晴
九日晴
十日晴 文國宿 梅屋敷

文化二年正月

文化二年正月

、只の木はのり出て立てり梅花
草つみのこぶしの前の入日哉
十一日 晴

、家もはや捨たくなりぬ春霞
、正月のけしきになるや泥に雪

龜井天神宮

○御 櫻 御 梅 の 花 松 の 月
ちるは梅畠の足跡大ききよ
後 か ら 吹 來 る 櫻 く 哉

十二日 晴 二竹來レ
申刻雨

十三日 雨 申刻ヨリ晴

人心險^{ハニメ}山川^{ヨリモシ}難^シ知^レ天^{ヨリモハ}天有^ハ三春夏秋冬旦^ニ寒期^ニ

十四日 霜 曇天

十五日 富五郎來 信阿來

海苔火とる御手にひゞくや日枝の鐘
○のり柴に安堵して居る小てふ哉
簀のへりにひたとひつゝく小てふ哉
十六日 常^川來

○陽 炎 の 内 か ら も 立 葎 哉

○陽 炎 や い と し き 人 の 杖 の 跡
かげろふに任せておくや餌すりこ水

春 雨 や 膳 の 際 迄 茶 の 木 原

○相 杵 は 女 も す 也 春 の 雨

、春雨や江戸氣はなれし寛永寺
、ちる花や土の西行もうかれ顔
、さし柳翌は出て行庵也

文化二年正月

文化二年正月

、青柳や二軒もやひの茶呑橋
○陽炎や笠の手垢も春のさま

十七日 晴

十八日 晴 富次郎宿 祇來ル

十九日 晴 閑齋出會

廿日 晴 恙 浙江 梅壽來

日本橋木原店本屋伊三郎方にて梅壽

土染もうれしく見えて柳哉
橋の芥つゝつき流る春日哉
揚土のいろにも春日也けり
山くや川の春日を針仕事
破風からも青空見ゆる春日哉
春の日や暮ても見ゆる東山

鳥もなき蝶も飛びけり古壘み
蝶とぶや夕飯過の寺参り
町口ははや夜に入し小てふ哉
とふ蝶に追抜れけり紙草履
文七とたかひ違ひに小てふ哉
豆程の人顯れし小てふ哉
うとましましき片壁かする柳哉
朝やけも又めづらしき柳哉
入相を待遠しがらる柳哉
入口に柳の立し都哉

廿一日 晴 其日庵會出席

廿二日 晴 野松 二竹 一白來ル

廿三日 晴 夜五ツ時流山出火

文化二年正月

文化二年正月

廿四日 晴 一白來

、雉なくや立出伏し馬の顔
 、あさぢふは夜もうれしや雉なく
 柱をも拭じまひけり春霞
 ○かすむ日や夕山かげの飴の笛
 、霞む日に寝正月かよ山の家
 誰が手につみ切れしよ瘦蕨
 人の目を逃れて寒いわらひ哉
 今晴れし雨とも見えてわらび哉
 ビンズルヲ一ナデナデ、木芽哉
 、すりこき木の舟にひつゝく小てふ哉
 春風や土人形をゑとる也
 ○二三本茄子植ても小てふ哉

蝶とぶや二軒もやひの瘦鳥

廿五日 夕國來 祇來ル

梅咲て常正月や山の家
 草山に顔おし入て雉のなく
 ○雉なくやきのふは見えぬ山鳥

廿六日 晴

廿七日 晴 夜雨 隨齋會出席

○古草のさらく雨やなく蛙
 あさぢふや目出度雨になく蛙
 膝ぶしへ鳴つきそうな蛙哉
 芦の鶴又おりよかし夕蛙
 片ヒザは月夜也けり夕蛙

廿七日 雨 兩國元町出火夜丑八刻

文化二年正月

文化二年正月

廿八日 雨 終日 油

廿九日 曇 夕雨 青川不來

雨六度 夜雨共七度

米高直ナルガ故ニ 薪高直ナルガ故ニ玉をかしき 桂をたく

大畜 初ニ乾ナレ共進ムニ不足 四五陰柔ナレ共剛陽ヲ止ム

二月

一日 晴 仙風庵會出席

人 鬼 か 野 山 に 住 ぞ 巢 立 鳥

○茶 島 にも 心 お く か よ 巢 立 鳥

其 夜 から 雨 に 逢 ひ け り 巢 立 鳥

二日 晴 月代

三日 晴

道彦と上野へ登る。清水舞臺にやすらふ。

○春の日を脊筋にあてることし哉

初午や女のさいに淋し好

○塊に裾引すつて梅の花

花見るもあぶなげのない所哉

四日 晴 初午 世恒 梅壽 祇兵來ル

うつくしい鳥見し當よ山をや

又一つ山をやくもおぼろ也

○あさぢふや翌やく藪の梅の花

○山やくや眉にはらく夜雨

三ヶ月や田螺をさぐる腕の先

、小田の鶴又おりよかし春の雨

文化二年正月

文化二年正月

五日 南風夜雨

六日 晴暖油

七日 曇寒夜少雪

春風の闇にも吹や浦の家
 葉がくれに鳴ぬつもりの蛙哉
 草蔭にぶつくさぬかす蛙哉
 、草かげや何をぶつくさゆふ蛙
 、菜の花にかこち顔なる蛙哉
 、糸屑にきのふの露や春のてふ
 八日 晴霜
 瘦藪もいなりおはして梅花
 梅咲くや見るかけもなき己か家
 初午の聞えぬ山や梅の花

九日 曇酉刻雨

斗食之献不疾易藪 水生虫不疾易水

鈴木與右衛門來訪

十日 晴禁足

○眩く岨の菜種も咲にけり
 菜の花も一ツ夜明やよしの山
 ○梅さくや見るかげもなき門に迄
 初午や山の小すみはごこの里

文化三年二月

文化二年二月

十一日 晴

初午を後に聞くや上野山

十二日 晴嵐

十三日 晴嵐

麥の葉のきつぱりとして花の雲

十四日 晴 會出席梅壽 祇兵

春雨 蠶

二三日はなぐさみといふ蠶哉

十五日 晴 耕潤來 二ノ午太い

イナリ參詣 大師根津開帳ニ入

上野山門ニ登

十六日 晴

十七日 晴

十八日 朝雨 南風吹 祇兵來

十九日 朝雨 南風吹 閑齋會出廷

柴の戸や世間並とて花の咲

かへる氣になれば風止櫻哉

◎草の葉や燕來初てうつくしき

淺草や乙鳥とぶ日の借木履

廿日 晴 曇 米買 アラク金八來ル

廿一日 晴 彼岸中日淺草山門ニ登 上野山門不開

廿二日 雨終日

廿三日 雨油

◎草摘やうれしく見ゆる土の鈴

◎はつ春も月夜となるや顔の皺

春の月さはらば霏たりぬべし

文化二年二月

文化二年二月

大淀や砂り摺舟の明安き
さりさては此長い日を田舎哉
春の目を降りくらしたる都哉
墓遅き羅漢鴻や皆たゝく
○ひよいくと瘦菜花咲く日永哉
桃の門猫を秤にかける也
山陰も桃の日あるか砂糖賣
蛙とぶ程はふる也草の雨
○なく蛙此夜葎も伸ぬべし
花ちるやいかにも黒き首筋へ
花さけや惟然が軒止るやら
花ちるやひだるくなりし顔の先
花の山飯買家はかすむ也

草の葉や彼岸團子にむしらるゝ
狙も来よ桃太郎来よ草の餅
京邊やヒガン太郎の先天氣
鐵糞も苔のふる也董草
壁土に丸め込まるゝ董哉
このましき董も咲よあみだ坊
○乙鳥のけふたい顔もせざりけり
廿四日 晴

伏見のや月さゝすとも春の山
菜の花がはなれにくいか小田雁
廿五日 晴 菜植る記 双樹來ル ハンロ來ル
廿六日 晴 双樹 泉路來ル

○はつ春も月夜となるや顔の皺
文化二年二月

文化二年二月

草の月手はやく過て春の月
春の月軒の雫の又おちよ
浅川や鍋すゝぐ手に春の月
沓持は松に立添ふ春の月
さし汝も朝はうれしやとぶ乙鳥
草の葉のひたぐ汝やとぶ乙鳥
鳥の巢の乾く間もなし山の雨
塊も心おくかよ巢立鳥

廿七日 晴 隨齋出席

一里の身すぎの櫻咲にけり
かいはいの口すぎになる櫻哉

廿八日 曇 一白來ル

廿九日 曇 月船 一白來ル

卅日 雨

菜を作文

三月

一日 晴 中齋會

葎家も春になりけり夜の雨
○松の木も小はやく暮て春の雨
○春 雨 や 蛤 殻 の 朝 の 月

二日 晴 巢光來 文國來

三日 雨 江左 成美 蓮志 池上訪

四日 雨 耳童來ル

五日 晴

文化二年三月